

東京大学構内遺跡調査研究年報 3

1998・1999 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

序 文

本調査室は組織改編による正式設立から 2000 年で 10 周年、臨時調査室の時期から数えると 16 年を迎えた。これを記念して、本学総合研究博物館と共催で特別展『加賀殿再訪』が行なわれ、学内外の多くの方々にこれまでの調査室の成果を見ていただくことができたのは大変有意義なことであった。

1984 年から本格的に開始された本郷キャンパスにおける発掘調査は、この地にかつて所在した加賀藩邸・大聖寺藩邸・富山藩邸・水戸藩邸内の土地利用の変遷や、そこで営まれた暮らしを明らかにしただけでなく、新分野「江戸時代考古学」の研究全般にわたって大きな資料と成果を提供してきた。また本郷だけでなく、駒場キャンパス、柏キャンパス、医科学研究所（港区）、あるいは理学部附属臨海実験所（三浦市）など各地に所在する本学校地においても発掘調査が行われてきた。

本調査室は学内の相次ぐ校舎等の新築工事に鋭意対応し、本郷キャンパスだけでも調査された地点の数は約 60 に達する。発掘調査というものは、現場での調査だけでなく、そこから出土した遺構・遺物の分析、その成果を公開する報告書の刊行をもって完結するものである。しかしながら、相次ぐ現場調査の要請によって後半の作業が十分追いつかないのが現実の状況である。こうした状況を多少なりとも改善し、年度ごとの調査室の活動を記録することを目的に刊行したのが『調査研究年報』である。本 3 号では主に 1998・1999 年度に実施した調査の概略を中心に掲載した。

この年報に収録した総合研究棟地点は、加賀藩 13 代藩主・前田斉秦の正室である浴姫の屋敷の台所付近に当たり、石組みの地下室などが出土した。本学の象徴として学外にも広く知られている赤門は、本来この屋敷の門であった。また弥生門地点の調査では、水戸藩邸と加賀藩邸との屋敷境について、絵図面ではうかがい知れぬ事柄が明らかになりつつある。

本郷キャンパスの全域が遺跡と認定され、ほとんどの工事に先だって埋蔵文化財調査が要求されることは、大学当局にとってまことに大きな負担であろう。しかし、本郷キャンパスを訪れる一般の方々が、キャンパス内に加賀藩邸の名残を尋ねることも少なくないと聞く。昨今、埋蔵文化財調査のあり方が根本から問われている状況にあるが、埋蔵文化財が国民共有の財産であるという原点に立ち、本調査室も構内遺跡の調査・研究、そして成果の公表という活動に、なお一層真摯に取り組む所存である。

東京大学埋蔵文化財調査室 室長
人文社会系研究科教授 今村 啓爾



巻頭写真1 経済学部地点から検出された石組みの地下室



巻頭写真2 同内部



卷頭写真 3 東京大学医科学研究所出土鉛塊

卷頭写真 4 飛騨加奈山絵図 鉛を吹く図

東京大学構内遺跡調査研究年報 3
1998・1999 年度

目 次

第 I 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

遺 跡 地 図	3
東京大学構内遺跡調査一覧	9
1 工学部強風シミュレーション風洞実験室新営工事に伴う埋蔵文化財調査略報	13
2 総合研究棟（文・経・教・社研）地点発掘調査略報	14
3 文系 4 研究所等暫定建物新営に伴う埋蔵文化財試掘調査略報	20
4 受変電設備棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報	24

写 真 図 版	27
---------------	----

第 II 部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

1998・1999 年度室員活動内容	35
埋蔵文化財調査室組織	39

第 III 部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 3

1 どんぶり考 附・わりばしの始まり	43
2 東京大学医科学研究所（旧大村藩下屋敷）から出土した鉛塊について	66

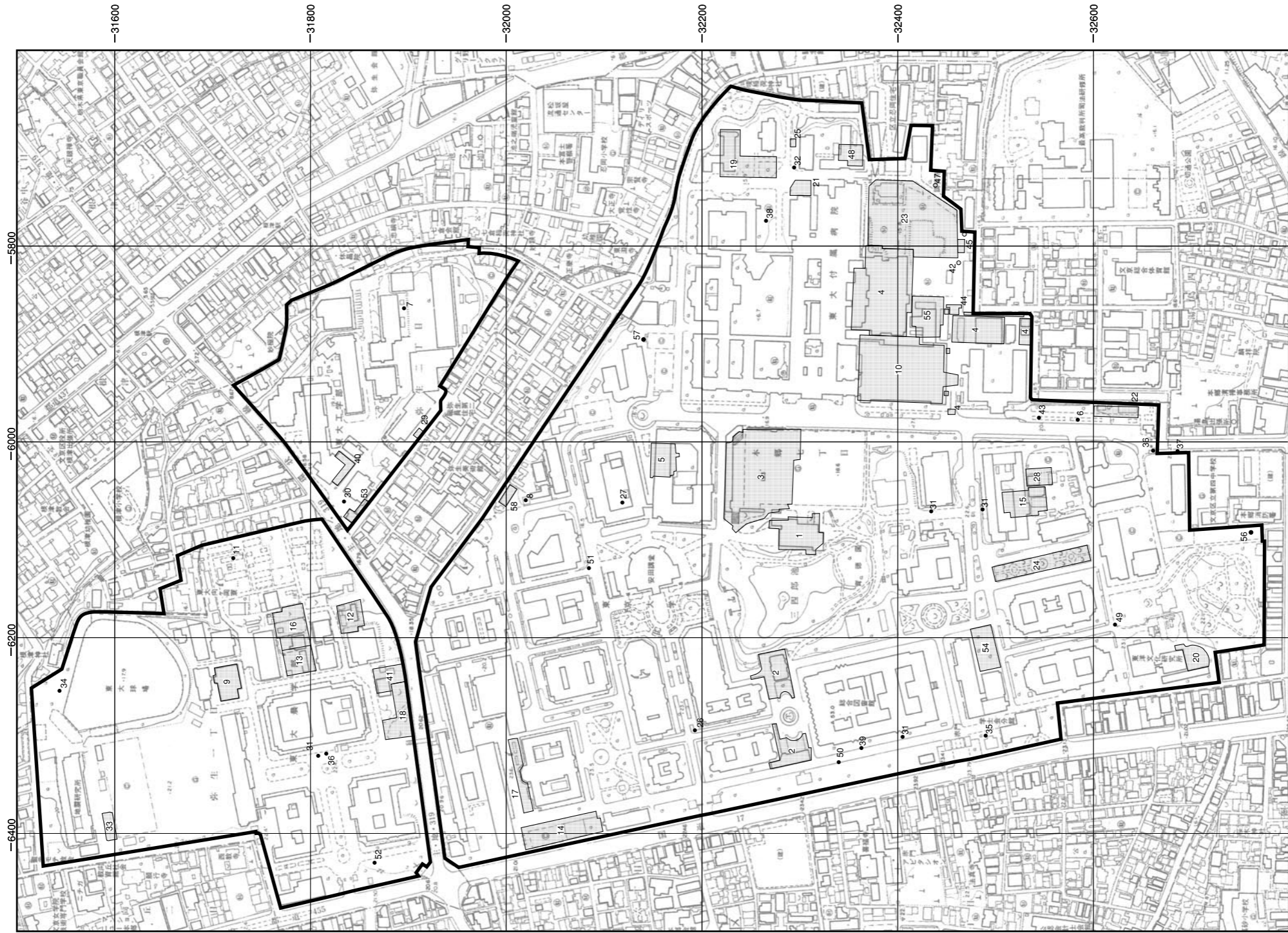
例 言

- 1 本年報は1998年4月1日から2000年3月31日までに、東京大学埋蔵文化財調査室が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告、および本調査室における研究成果をまとめたものである。
- 2 該当期間の調査の略報は第I部に掲載した。ただし医学部附属病院第2中央診療棟地点(特期調査)に関しては、II期調査を終了した段階で併せて報告する。
- 3 遺構の略号は奈良文化財研究所の方式に従い、各調査地点ごとに通し番号を1から付した。
- 4 本文の執筆者名は文末に明記した。ただし第III部に関しては、各章の冒頭に執筆者名を明記した。
- 5 第I部の各キャンパスにおける調査一覧および遺跡地図は原 祐一が作成した。
- 6 本年報の作成は室員がこれにあたり、追川吉生が編集を担当した。
- 7 本年報の作成にあたっては以下の機関よりご協力をいただいた。記して厚く感謝の意を表す。

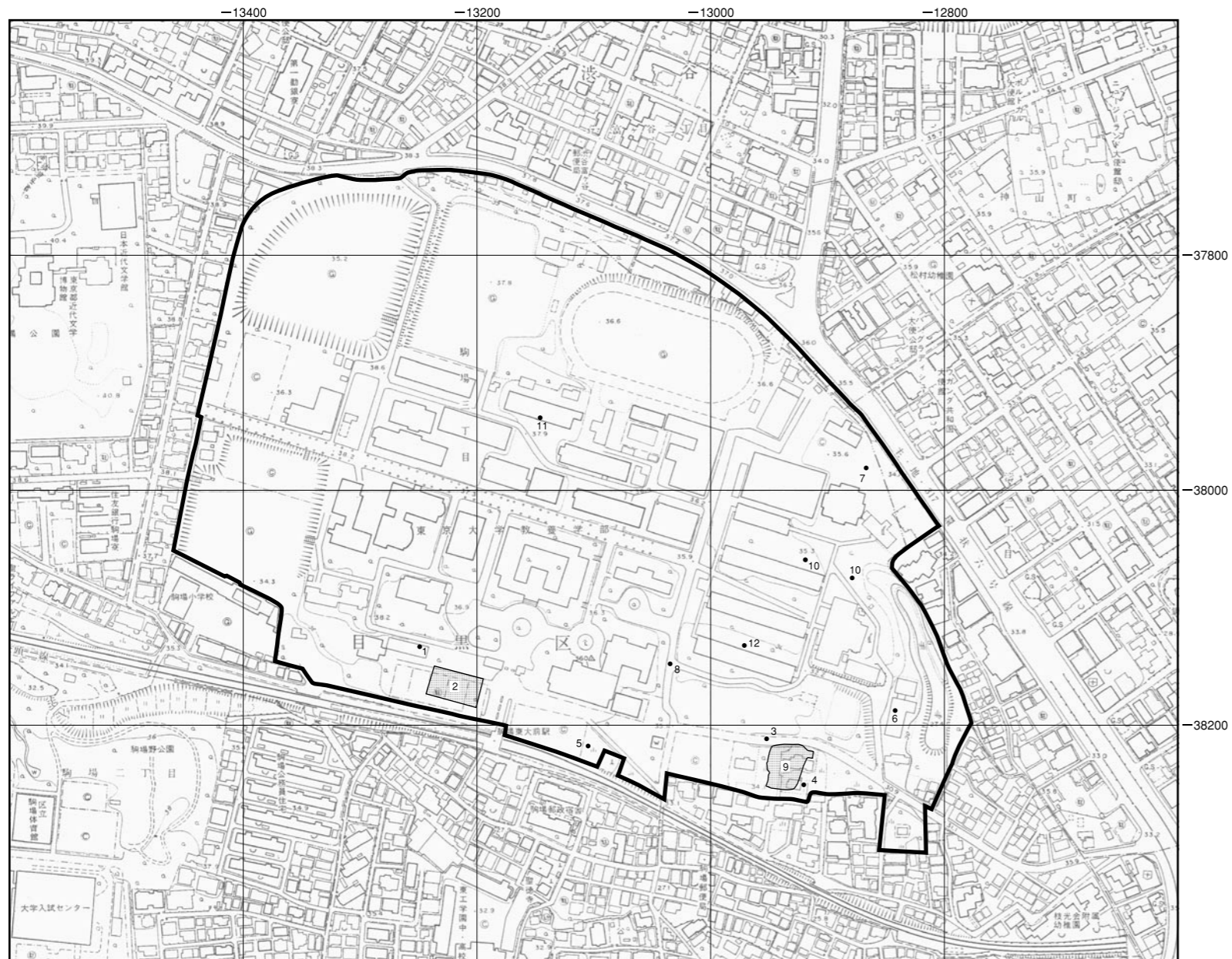
(株)岩崎美術社 国立国会図書館 静嘉堂文庫 東京国立博物館 東京都立中央図書館

第 I 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

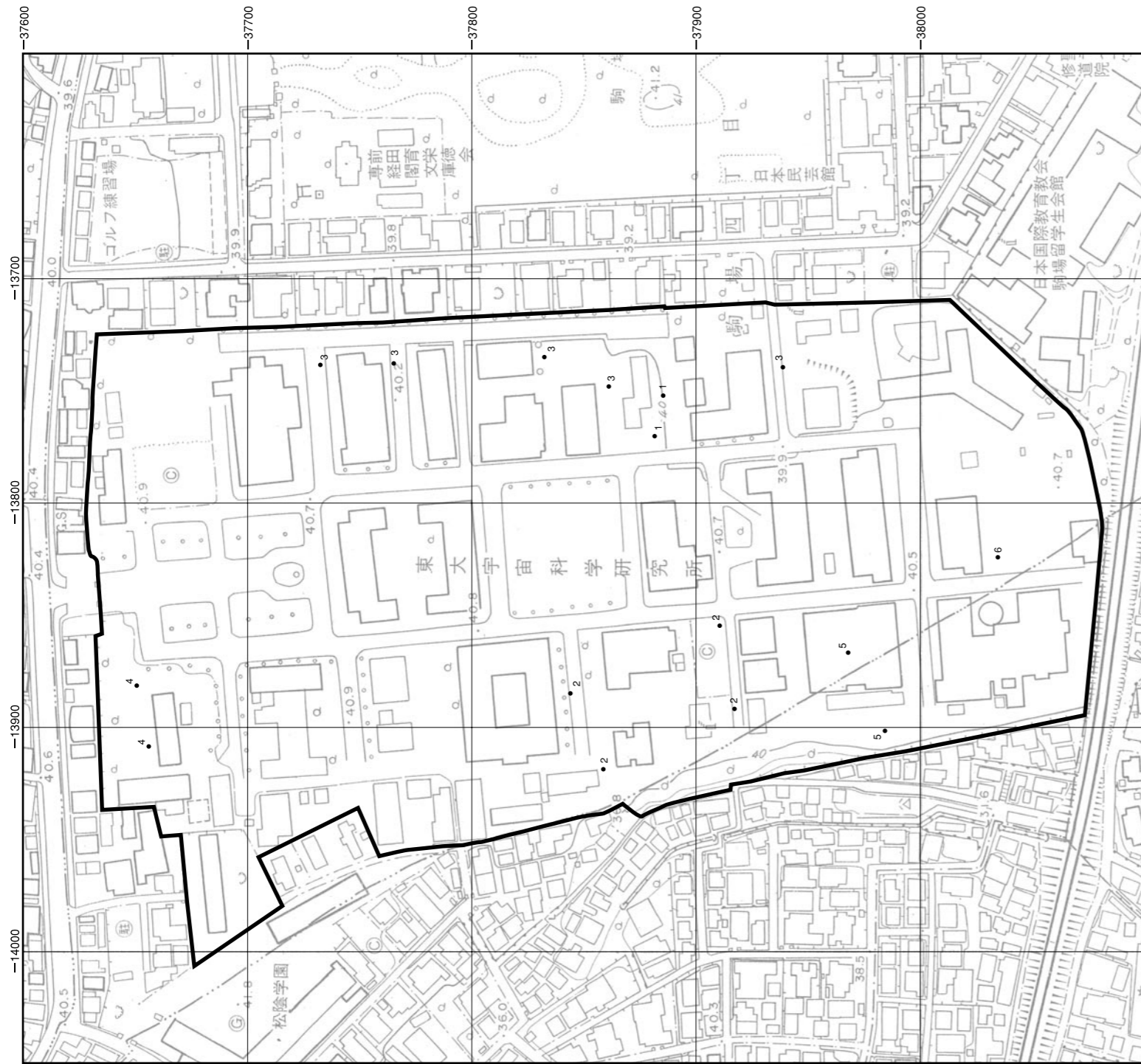
1 工学部強風シミュレーション風洞実験室新営工事に伴う 埋蔵文化財調査略報	13
2 総合研究棟（文・経・教・社研）地点発掘調査略報	14
3 文系4研究所等暫定建物地点発掘調査略報	20
4 受変電設備棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報	24



遺跡地図 1 (本郷構内)



遺跡地図2 (駒場 I 構内)



遺跡地図3 (駒場Ⅱ構内)

表1 本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地名(略称)	調査種別	日付	面積(u)	担当者	調査の概要
本郷	1	1984	山上会館(U)	事前調査	1984.4.1.1 ~ 85.6.30	1500	西田泰民・谷豊信・小川静夫	『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	2	1984	法学部4号館・文学部3号館(文)(法)	事前調査	1984.4.1. ~ 85.3.31	2500	大塚達朗	『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	4	1984	医学部病院(病中)(エネセン)(給水)(共同溝)	事前調査	1984.10.1 ~ 87.3.31	7700	藤本強	『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
本郷	5	1984	理学部7号館(理D)	事前調査	1985.2.1 ~ 10.8	750	羽生淳子	『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
本郷	3	1985	御殿下グランド(G)	事前調査	1985.7.29 ~ 87.6.30	6000	寺島・小川静夫・倉林真砂斗	『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	9	1985	農学部家畜病院(VMC)	試掘調査	1985.8.1 ~ 26	87	西田泰民	江戸時代遺構・遺物
本郷	6	1986	バス通り上水(上水)	立会調査	1986.5.12 ~ 7.20		寺島	江戸時代武家屋敷遺構・遺物
本郷	8	1987	弥生門脇変電施設	立会調査	1987.12.15 ~ 16		武藤	江戸時代河川流路・遺物
本郷	7	1987	タンデム(タンデム)	試掘調査	1988.2.15 ~ 17	28	成瀬・武藤	江戸時代遺構・遺物、古墳時代住居址
本郷	15	1988	薬学部新館(YS)	試掘調査	1988.8.3 ~ 5		寺島	江戸時代遺構・遺物
本郷	9	1989	農学部家畜病院(VMC)	事前調査	1990.3.1 ~ 3.14	1040	武藤	江戸時代武家屋敷(水戸藩中屋敷)遺構・遺物
本郷	10	1990	外来診療棟(HG)	事前調査	1990.6.27 ~ 91.2.21	5500	成瀬・堀内・武藤	江戸時代武家屋敷(加賀藩下屋敷、上屋敷、大聖寺藩上屋敷)遺構・遺物、旧石器時代遺物
本郷	11	1991	農学部ガラス室	試掘調査	1991.6.29 ~ 9.19	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	13	1991	農学部7号館(特期)	試掘調査	1991.1.6 ~ 7	8.25	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	13	1992	農学部(7号館)新営(特期)(FA792)	事前調査	1992.10.6 ~ 11.16	1170	武藤	江戸時代武家屋敷(水戸藩中屋敷)遺構・遺物
本郷	12	1992	農学部図書館	試掘調査	1992.10.21	4	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	15	1992	薬学部新館(YS)	事前調査	1992.10.21 ~ 12.18	1300	堀内・寺島	江戸時代武家屋敷(加賀藩上・下屋敷)遺構・遺物
本郷	14	1992	工学部校舎(14号館)(工14)	事前調査	1992.11.26 ~ 93.2.23	1785	成瀬・堀内	江戸時代武家屋敷(御先手組屋敷)遺構・遺物
本郷	12	1992	農学部図書館(FAL)	事前調査	1993.3.9 ~ 3.25	408	武藤	江戸時代武家屋敷(水戸藩中屋敷)遺構・遺物
本郷	16	1993	農学部7号館(監期)	試掘調査	1993.4.27	15	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	18	1993	総合研究棟	試掘調査	1993.4.28	15	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	17	1993	工学部1号館	試掘調査	1993.5.25	16	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	19	1993	医学部附属病院看護婦宿舎(HN)	事前調査	1993.8.4 ~ 94.1.17	746	成瀬	江戸時代武家屋敷(富山藩上屋敷)、古墳時代住居址、縄文時代遺構
本郷	16	1993	工学部校舎(7号館)(監期)(FA793)	事前調査	1993.11.3 ~ 26	1000	武藤	江戸時代武家屋敷(水戸藩中屋敷)遺構・遺物
本郷	18	1993	総合研究棟(SK)	事前調査	1993.11.18 ~ 12.28	1007	堀内	江戸時代武家屋敷(水戸藩中屋敷)遺構・遺物
本郷	17	1993	工学部校舎(1号館)(FE1)	事前調査	1993.12.6 ~ 94.2.10	616	武藤	江戸時代武家屋敷(加賀藩上屋敷)遺構・遺物
本郷	21	1993	医学部附属病院MRI-CT棟(MRI)	事前調査	1994.1.18 ~ 3.12	400	成瀬	江戸時代武家屋敷(富山藩上屋敷)、古墳時代住居址、縄文時代遺構・遺物
本郷	20	1993	総合研究資料館(TUM)	事前調査	1994.2.14 ~ 4.8	600	堀内	江戸時代武家屋敷(加賀藩上屋敷)遺構・遺物
本郷	22	1994	本郷福利施設	試掘調査	1994.4.15	3	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟(特)(HW(特))	事前調査	1994.4.21 ~ 11.16	2716	成瀬・原	江戸時代武家屋敷(大聖寺藩上屋敷・加賀藩下屋敷)、古墳時代住居址、中世遺構、旧石器時代遺物
本郷	24	1994	医学部教育研究棟1次(医研(特))	試掘調査	1994.5.18 ~ 19	16.6	武藤・鮫島	江戸時代遺構・遺物

地区	番号	年度	遺跡名・調査地名(略称)	調査種別	日付	面積(u)	担当者	調査の概要
本郷	26	1994	法文十字路外灯	立会調査	1994.9.5 他		成瀬・鮫島	江戸時代砂利敷面
本郷	27	1994	理学部1号館	立会調査	1994.10.3～18		寺島	
本郷	24	1994	医学部教育研究棟1次(医研特)	事前調査	1994.11.17～4.28	1188	堀内・鮫島	江戸時代武家屋敷(加賀藩上屋敷・御殿空間)遺構・遺物
本郷	25	1994	医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置場(HND)	事前調査	1995.1.30～3.3	45	原	江戸時代武家屋敷(富山藩上屋敷)古墳時代・縄文時代住居址
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟監期(HW監)	事前調査	1995.1.31～96.5.31	3380	成瀬・原・大成	江戸時代武家屋敷(大聖寺藩上屋敷・加賀藩下屋敷)遺構・遺物、中世遺構、古墳時代住居址、縄文時代遺物
本郷	32	1994	医学部附属病院看護婦宿舎電気ケーブル埋設	立会調査	1995.3.2		原	遺構・遺物なし
本郷	29	1995	大型計算機センター電気電機室設備(ACC)	事前調査	1995.7.18～31	78	鮫島	戦時中防空壕・江戸時代遺物
本郷	28	1995	薬学部資料館(FPS)	事前調査	1995.7.24～9.2	540	武藤	江戸時代武家屋敷(加賀藩上屋敷)遺構・遺物、縄文時代遺物、旧石器時代遺物
本郷	30	1995	工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他(AFC)	事前調査	1995.8.28～96.22	63	鮫島	江戸時代遺構、弥生時代方形周溝墓、縄文時代遺物
本郷	33	1995	地震研究所テレメタリング観測施設	試掘調査	1995.10.18	6	武藤	遺構・遺物なし
本郷	31	1995	ATMネットワーク施設整備	立会調査	1995.11.20～24		武藤・堀内・鮫島・原	江戸時代遺物
本郷	34		グラウンド	立会調査			寺島	
本郷	35	1993	経済学部前路面陥没	立会調査	1993.9.28		成瀬	江戸時代遺構
本郷	36	1993	農学部ガス管理設	立会調査	1993.10.15		成瀬	江戸時代遺構
本郷	35	1994	経済学部前路面陥没	立会調査	1994.5.14		成瀬	
本郷	36	1994	龍岡門門衛所移築	立会調査	1994.8.24		成瀬	
本郷	37	1994	屋外環境整備等工事龍岡門～附属病院	立会調査	1994.10.13		成瀬・原	江戸時代石垣
本郷	38	1994	医学部附属病院北病棟クリーンルーム改修工事	立会調査	1994.12.18		成瀬	
本郷	39	1994	史料編纂所前埋設	立会調査	1995.3.10		成瀬	江戸時代遺物
本郷	40	1996	工学部全径間風洞実験室(A F L)	事前調査	1996.1.22～3.7	252	鮫島	近代道路状遺構、江戸時代遺構、縄文時代埋没谷
本郷	33	1996	地震研テレメタリング地震観測施設新営(E Q L)	事前調査	1996.4.15～5.2	360	武藤	江戸時代武家屋敷跡
本郷	41	1996	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(ベンチャー)	事前調査	1996.4.15～6.20	626	堀内	旧石器時代遺物
本郷	42	1996	医学部附属病院基幹整備、共同溝等、樹木移植	立会調査	1996.4		成瀬	江戸時代遺構・遺物
本郷	43	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK1)	事前調査	1996.5.12～5.18	20	成瀬	江戸時代遺構・遺物
本郷	44	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK2)	事前調査	1996.5.20～6.28	102	成瀬	江戸時代遺構・遺物
本郷	45	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK3)	事前調査	1996.5.20～6.28	176	大成	江戸時代遺構・遺物
本郷	46	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK4)	事前調査	1996.5.20～6.28	3	大成	江戸時代遺構・遺物
本郷	47	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK5)	事前調査	1996.5.20～6.28	3	原	講安寺墓域
本郷	48	1996	医学部附属病院看護婦宿舎建設地点監期(HN監)	事前調査	1996.11.5～97.1.31	525	原・大成	縄文時代遺構・遺物、古墳時代遺構・遺物
本郷	24	1996	医学部教育研究棟2次(医研監)	事前調査	1997.3.10～4.25	416	堀内・大成	江戸時代遺構・遺物、縄文時代遺構
本郷	49	1997	外灯整備工事1	立会調査	1997.4.13～4.30		原	江戸時代遺構・遺物

地区	番号	年度	遺跡名・調査地名(略称)	調査種別	日付	面積(u)	担当者	調査の概要
本郷	50	1997	外灯整備工事2	立会調査	1997.4.13～4.30		原	江戸時代遺物
本郷	51	1997	外灯整備工事3	立会調査	1997.4.13～4.30		原	
本郷	52	1997	農学部(21世紀館)木質ホール建設予定地点	試掘調査	1997.7.14～7.18	50	大成	江戸時代(加賀藩邸)遺構・遺物
本郷	53	1998	工学部強風シュミレーション風洞実験室新営(AF備)	試掘調査	1998.12.22・23	30	原	江戸時代遺構・遺物
本郷	54	1998	総合研究棟(文・経・教・社研)	試掘調査	1999.1.6～8	28	堀内	
本郷	53	1998	工学部強風シュミレーション風洞実験室新営(AF備)	事前調査	1999.1.7～25	300	原	江戸時代遺構・遺物、近代遺構・遺物
本郷	54	1999	総合研究棟(文・経・教・社研)	事前調査	1999.5.24～11.2	1000	堀内・追川	江戸時代遺構・遺物
本郷	55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟(臨期)(2中階)	試掘調査	1999.7.14	3	成瀬	江戸時代遺構・遺物
本郷	55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟(臨期)(2中階)	事前調査	1999.10.12～2000.2.25	1270	成瀬・原・追川	江戸時代(大聖寺藩上屋敷)遺構・遺物
本郷	56	1999	文系4研究所等暫定建物	試掘調査	1999.12.16～17	16	成瀬	江戸時代遺構・遺物
本郷	57	1999	環境安全センター	立会調査	2000.1.17		成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	中央診療棟(臨期)受変電設備棟新営(YM)	試掘調査	2000.2.3・4	30	原	江戸時代遺構・遺物
本郷	58	1999	中央診療棟(臨期)受変電設備棟新営(YM)	事前調査	2000.2.5～3.31	300	原	

表2 駒場(特)地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日付	面積(u)	担当者	調査の概要
駒場(特)	1	1992	教養学部保健センター	試掘調査	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒場(特)	3	1993	数理学研究棟	試掘調査	1993.5.8～15	350	堀内	縄文時代遺構
駒場(特)	2	1993	教養学部情報教育棟(FGE)	事前調査	1993.8.10～10.20	940	武藤	絶文時代遺構・遺物
駒場(特)	4	1994	数理学研究棟擁壁工事	立会調査	1995.1.20～27		武藤	明治時代遺構・遺物
駒場(特)	5	1994	数理学研究棟関連東電マンホール増設・管路新設工事	立会調査	1995.1.24～4.12		武藤	平安時代遺物、縄文時代遺物
駒場(特)	8	1995	数理学研究棟ガス埋設工事	立会調査	1995.5.17～18		武藤	遺構・遺物なし
駒場(特)	8	1995	数理学研究所水道埋設工事	立会調査	1995.6.27～28		武藤	遺構・遺物なし
駒場(特)	6	1995	教養学部伝統文化活動施設	試掘調査	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場(特)	7	1995	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘調査	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場(特)	9	1996	数理学研究科(臨期棟(数理))	事前調査	1996.12.12～97.2.6	1160	堀内	旧石器時代遺物、縄文時代遺構・遺物、平安時代遺構・遺物
駒場(特)	10	1997	教養学部キャンパス・プラザ新営	試掘調査	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒場(特)	11	1999	教養学部総合研究棟新営	試掘調査	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒場(特)	12	1999	教養学部図書館新営	試掘調査	1999.7.26～8.3	200	原	埋没谷

表3 駒場監地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日付	面積(u)	担当者	調査の概要
駒場監	1	1996	東大生研校舎新営	試掘調査	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒場監	2	1996	先端研校舎新営	試掘調査	1996.5.15～5.17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒場監	3	1996	先端研校舎新営	試掘調査	1996.10.24～10.25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒場監	4	1998	設備センター新営	立会調査	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒場監	5	1998	国際・産学共同研究センター新営	試掘調査	1998.8.5	90	原	縄文土器、遺物包含層
駒場監	6	1998	事務・図書棟暫定施設	試掘調査	1999.12.13～15	50	大成	

表4 その他の地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日付	面積(u)	担当者	調査の概要
三浦市		1988	理学部附属臨海実験所新研究棟 [新井城]	試掘調査	1988.7.4～8.2	80	寺島	中世城郭遺構・遺物
文京区		1991	理学部附属植物園研究温室 初期 [原町遺跡] (BG)	試掘調査	1991.7.24～25	5	武藤	縄文時代遺物
文京区		1991	追分学寮	試掘調査	1991.8.23～24		成瀬	江戸時代武家屋敷遺構・遺物
豊島区		1991	豊島学寮	試掘調査	1991.8.26～30	29	武藤	遺構・遺物なし
三鷹市		1991	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡]	試掘調査	1991.9.15～30	350	堀内・成瀬	旧石器時代遺物
三鷹市		1991	井の頭学寮	試掘調査	1991.9.30～10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
港区		1991	白金学寮	試掘調査	1991.11.25～26	10	武藤	江戸時代遺物
文京区		1993	理学部附属植物園研究温室 監期 [原町遺跡] (KO)	事前調査	1993.5.25～6.6	200	成瀬	江戸時代武家屋敷(白山御殿、小石川薬園)遺構・遺物、縄文時代遺物
三鷹市		1992	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡] (監期(三广1))	事前調査	1992.6.29～9.19	2100	堀内・成瀬	江戸時代遺構・遺物、縄文時代遺物、旧石器時代遺物
港区		1992	医科学研究所看護婦宿舎	試掘調査	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
三浦市		1992	理学部附属臨海実験所新研究棟 (MMBS)	事前調査	1992.7.20～9.25	1700	武藤・寺島	中世城郭(新井城)遺構・遺物・人骨
三浦市		1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設工事	立会調査	1993.4.20～23		武藤	中世城郭遺構・遺物
三浦市		1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築工事	立会調査	1993.5.7～8		武藤	中世城郭遺構・遺物
三鷹市		1993	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡] (監期(三广2))	事前調査	1993.5.28～11.8	3280	堀内	縄文時代遺構・遺物、旧石器時代遺物
三鷹市		1994	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡] (監期(三广3))	事前調査	1994.5.13～8.17	1950	堀内	江戸時代遺構、縄文時代遺構、旧石器時代遺物
千葉市		1994	検見川運動場体育セミナーハウス [玄蕃所遺跡] (GMB)	確認調査	1994.7.11～7.18	930	武藤・鮫島	平安時代住居址、縄文時代住居址
千葉市		1994	検見川運動場体育セミナーハウス [玄蕃所遺跡] (GMB)	事前調査	1994.7.19～8.21	496	武藤	平安時代住居址、縄文時代遺構、旧石器時代遺物
港区		1994	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘調査	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
港区		1995	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘調査	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
柏市		1996	柏キャンパス校舎新営	試掘調査	1996.10.28～10.29	125	武藤	

1 工学部強風シミュレーション風洞実験室新営工事に伴う埋蔵文化財調査略報

I. 調査の経緯と経過

東京大学本郷構内の遺跡・工学部強風シミュレーション風洞実験室地点（略号 AF IV）は浅野地区工学部大形構造物実験室の北に位置する。埋蔵文化財調査室は工学部より工学部強風シミュレーション風洞実験室新営工事に伴う遺跡に関する照会を受けた。

調査地点周辺は、弥生町遺跡群の中に位置する埋蔵文化財の包蔵地にあたる。隣接する調査地点である、工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他に伴う埋蔵文化財発掘調査では弥生時代の溝状遺構等を検出しており、当地点は弥生町遺跡群に関する遺跡の存在が予想された。また、当地点は江戸時代の水戸藩邸に該当し、江戸時代の遺跡の存在が予想された。以上から、埋蔵文化財調査室では平成 10 年 12 月 22・23 日に試掘調査を行なった。その結果、江戸時代の遺跡を確認し、事前調査を平成 11 年 1 月 7 日から同年 1 月 25 日まで行った。当地点は住宅地に隣接することもあり、1 月 24 日遺跡の一般公開を行なった。調査は寺島孝一の指導のもと原祐一が担当した。調査面積は 300 m²である。

II. 調査の結果

調査区中央部に旧建物跡の基礎による攪乱があり、調査区のほとんどの部分が破壊されていた。また、表土の削平と、遺物の出土が少ないことからほとんどの遺構年代を確定することができなかった。遺構のほとんどは調査区北側で確認された。礎石、井戸、土坑が主要な遺構である（写真 1・2）。

近代 礎石は覆土に混入した陶磁器、出土状況から、近代以降の建物もしくは何らかの施設に伴うものと考えられる。

江戸時代 井戸（SE18）は上部が攪乱を受けているため、上部施設は不明である。遺構確認面から 2.5 m まで掘削を行なった。出土遺物は陶磁器類、金属製品である。

III. 成果と課題

今回の調査では当初予想された弥生時代の遺構の確認はできなかった。江戸時代の遺構は、攪乱による破壊を加味しても密度が薄いことが指摘できる。今後、周辺部の遺跡を含め検討を行なっていきたい。（原 祐一）

【参考文献】

鮫島和大 1999 「工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」
『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 1997 年度』；41-43

2 総合研究棟（文・経・教・社研）地点発掘調査略報

I. 調査の経過

経済学部本館南側に文学部・経済学部・教育学部・社会科学研究所の総合研究棟を建設するに際し、大学当局から当該地区の埋蔵文化財についての照会があったのは1998年であった。現存する絵図面からは、当該地点周辺が加賀藩上屋敷の御殿空間であることが知られており、隣接する医学部教育研究棟において実施された発掘調査では、周囲の壁面が瓦によって積まれた地下室や能舞台などの遺構や、多量の遺物が出土している（大成1997、堀内1999）。当該地点においても、後代の建造物による破壊を免れていれば、加賀藩邸に関連する遺構・遺物の検出が予想された。埋蔵文化財調査室では1999年1月6日より1月8日まで試掘調査を実施し、建設予定地における埋蔵文化財の有無及び密度を確認した。調査面積約28㎡の試掘調査において、近代以降の盛り土の下からは江戸時代の遺物包含層が確認され、また石組みや礎石、あるいは当時の生活面と考えられる硬化面を確認した。そこで同年5月から11月にかけて本調査を実施した。

II. 調査の成果

1. 調査方法

調査範囲は1026㎡である。これを東側と西側の2つの調査区に分けて調査を実施した。前者は509㎡、後者は517㎡である。両調査区とも近世の生活面は2面あり、上からA面・B面と呼称した。またグリッドには医学部教育研究棟の調査から継続した番号を付している。

2. 調査区東側

1) A面の遺構

建物礎石群 A面から検出された礎石は、1.8mの間隔で4列に配置される。調査区中央部は植栽によって破壊されていたが、幅1.8mという1間に相当する間隔が認められることから、これらの礎石が一連の建物の基礎であることがうかがえる。礎石には直径40-50cmの楕円形を呈する礫が用いられている。この礫の下に直径15cm前後のやや小さな礫が4-6個体据えられており、更にその下には直径50cm前後の礫がある。この最下底の礫は礎石にかかる重量を支える根石であろう。こうした構成の礎石が存在する一方、根石を有さない構成の礎石も認められる。土層断面の観察によれば、これら根石を有さない礎石の場合、礎石の下に堆積する土層にはV字状に硬化した層が認められる。出土遺物は19世紀代であるが量は少ない。

SX103 調査区の南側に東西方向に延びる、南北幅がおよそ1.2mの石組み遺構である（写真3）。本遺構は3層からなり、上段と中段は直径20-30cmの礫や、一辺10-20cm程度の板状の破

砕礫によって構成されている。下段は上段よりもやや大きめの石がいくつか据えられている。建物礎石群同様、共伴遺物はほとんど検出されなかった。

SU107 南北5 m、東西2.2 m、深さ2.3 mの地下室である（巻頭写真1・図4）。地下室は周囲を1辺約30 cmの四角錐を呈する石（間知石）で組まれている。間知石には緑色を呈した凝灰岩系の石材が用いられており、鑿によって面取りされている。間知石の裏には破碎礫が裏込め石として用いられている。破碎礫は間知石と同一の石材であり、面取りや微調整で生じたものである。遺構の覆土には大量の焼土と焼けた瓦が含まれていた。

床面は張り床状に構築されおり、そこからムシロが検出された。また地下室の南よりの部分に、南北0.8 m、東西0.8 m、深さ1.2 mの地下室が更に設けられている（巻頭写真2）。この小地下室も石で組まれている。しかしその石材は地下室本体とは異なり、軟質で白色を呈する石材で、板状に加工されている。小地下室の東西南北の壁面にこの石材が4段ずつ積まれており、上段の石にはスリット状の窪みが認められる。このスリット状の窪みは蓋掛けのための加工と考えられる。

地下室の上半分は調査時には既に破壊されていたため、天井部分や出入り口の構造は詳らかでない。しかし写真にもあるように北側の壁面には間知石を用いた階段が認められることから、出入り口は地下室の北側にあったことが推定される。この石段の掘り方は、石の設置を容易にするように階段状に掘り込まれたローム層で、石段との間には破碎礫が挟まれていた。また石段の付

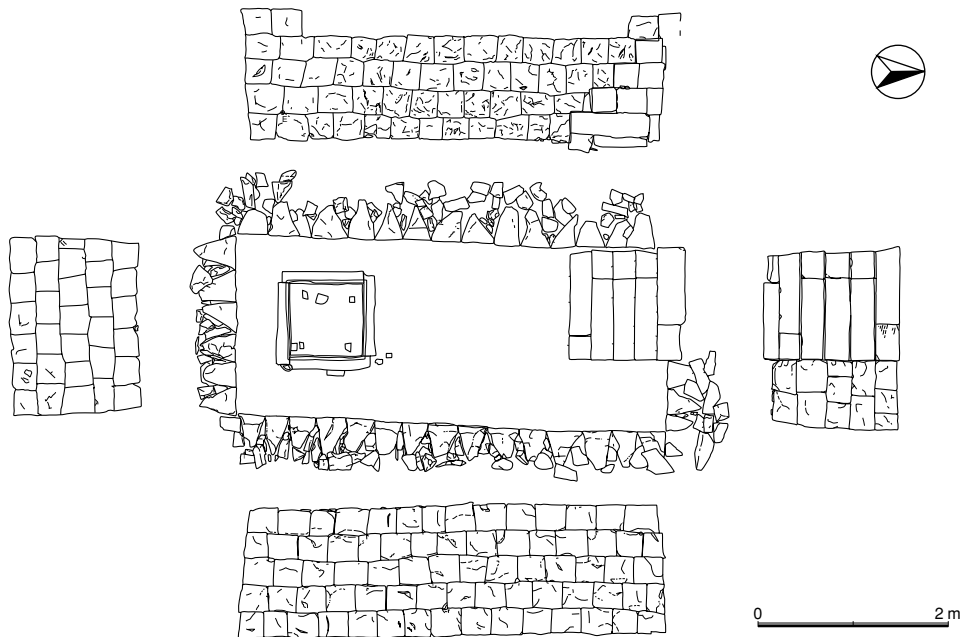


図4 SU107 実測図 (S=1/80)

近には石段自体の滑落を防ぐためのものであると思われる柱穴が認められる。

遺物は19世紀の陶磁器・土器である。特に裏側に墨書きで「御膳所」と書かれた瀬戸もしくは美濃製（以下、瀬戸・美濃製と呼称）の陶器碗（写真4）や、「御末」と釘書きされた肥前製磁器碗（写真5）が注目されよう。なお覆土に大量に含まれていた焼けた瓦や土は、遺物の年代から明治元年の本郷邸の火災によるものであると思われる、本遺構もこの火災によって廃絶されたものであると考えられる。

SK110 南北2.0 m、東西1.5 mの方形を呈する遺構である。覆土には大量の陶磁器・土器の他に貝・魚骨・獣骨も含まれており、ゴミ穴であると考えられる。遺物はSU107と同様、19世紀代のものを中心とする。また写真7のような葵紋の軒丸瓦が1点出土した。

SK122 南北0.7 m、東西1.5 m、深さ0.5 mの方形を呈する遺構である（写真8）。遺構の中央部は赤色に硬化しており、1本の溝によって東西に仕切られている。東側では板材と漆喰が検出され、周囲の壁面には板の痕跡が認められる。便所跡である。

SK162 調査区北東隅にある縦1.0 m、横0.2 mの板状の石がおおよそ3 m間隔で東西に2本並列する遺構である（写真9）。この石と石の間は一段低くなっており、石の南北には北に13基、南に8基の柱穴を伴う。

2) B面の遺構

SD200 東西方向に延びる溝状遺構である。溝の底部には、30 cm程度の方形を呈した平坦な石が等間隔に並んでいる。この石の表面には柱痕が認められた。周囲に本遺構と対になる遺構が存在しないことから、建物の礎石ではなく塀の基礎と考えられる。

3. 調査区西側

1) A面の遺構

前述のようにSX103が西側の調査区でも認められた。それ以外にも数遺構が検出されている。いずれの遺構も遺物量はごく少量であった。

2) B面の遺構

SK505 南北5.0 m、東西2.0 m、深さ0.3 mの長楕円形を呈する遺構である。多量の炭化物と共におおよそ20点の金箔瓦が含まれていた（写真10・11）。陶磁器・土器は検出されていない。金箔瓦は梅鉢紋の軒丸瓦を主体に、軒平瓦・鬼瓦が認められる。いずれも瓦の表面に漆を塗布し、その上に金箔を施している。鬼瓦のみは表面の凸部に木製のソケットを嵌め込み、その上に漆を塗布した後、金箔を施していることが観察された。後者の方が金箔を施した表面に、瓦本来の形状がしっかりと表れる。軒丸・軒平瓦に比べて大振りな鬼瓦のような製品には、こうした製作技法が採られたのかもしれない。覆土に焼土は含まれておらず、瓦にも焼けた痕跡は認められない。

SD428 南北 13.0 m、東西 0.7 m、深さ 2 m の溝である（写真 12）。調査区をほぼ南北に通っている。錆びた鉄釘が大量に出土し、また調査区南側には木樋が部分的に遺存していた。上水溝である。この木樋を取り上げると、ローム層に南北方向のクラックが認められた。地震に伴う地割れ痕と考えられる。

SU268 南北 5.0 m、東西 6.5 m、深さ 3.5 m の階段を有する地下室である（写真 13）。この地下室には、写真にみられるように周囲に礎石が配されていた。地下室の階段は土を掘り込んで造られており、土留めのために用いられた板材が残存していた。出土した陶磁器は 17 世紀後半のものである。床面に礎石が配されていることから、この地下室が柱で天井を支えていた構造であったことがうかがえる。

SD449 南北 13.0 m、東西 0.8 m、深さ 1.2～1.5 m の溝で一部 SD428 と切り合い関係にある。新旧関係は後者の方が新しい。溝の底面には 1 辺約 30 cm、高さ約 10 cm の石が配置されている。

SK641・642 円形を呈する採土坑である。覆土の上層は他の遺構には見られない黒色土で、多くの貝殻を含む。遺物は肥前製磁器を伴わず、瀬戸・美濃製の天目碗やカワラケ、あるいは中国製の磁器が出土した。本地点中で最も古い時期に該当する遺構である。遺物としては他に漆器碗がある。

Ⅲ. 調査の課題

1. A 面の調査

本調査地点を現存する本郷邸の絵図面と対比させると、幕末期には溶姫の御殿（「御住居」・以下、便宜的に溶姫御殿と呼称する）の中に含まれていたことがわかる。この御殿は加賀藩 13 代藩主・前田斉秦のもとに入興することとなった 11 代将軍・徳川家斉の 21 女、溶姫の御殿として、1825（文政 8）年に建てられたものである。その門は赤門として広く知られている。また、溶姫御殿の西側には富士山と記された部分があるが、これは旧富士権現のことである。富士権現がいつ頃建立されたかについては註らかでないが、その後この地に加賀藩邸ができたため、駒込の富士社に遷座したという（宮崎勝美氏のご教示による）。しかしながら富士山だけは残り、明治時代以降は椿山の名称で呼ばれていた。実にこの富士山（椿山）は 1964（昭和 39）年に経済学部校舎が新築された際に取り壊されるまで、本郷キャンパスに残っていたのである。こうした本学構内に現存する赤門（実際には若干移動しているが）や、つい最近まで現存していた富士山（椿山）、更にはこれまで調査した本郷構内の別地点との知見を加えて絵図面を更に検討していくと、本調査地点が溶姫御殿の中でも特に膳所周辺にあたることが想定された。

絵図面には膳所の一カ所に○が記されているが、おそらくこれは井戸の存在を示している。調査では井戸の検出はなかったものの、SU107 からは高台内に「御膳所」と墨書きされた瀬戸・美濃製の陶器碗が出土している。また SU110 の覆土には大量の食物残渣が含まれていた。こうした遺構のあり方は、当該地点が膳所であったことの傍証になろう。

ところでこのSU107であるが、間知石で組まれたこうした地下室の用途は一体どのようなものであったのだろうか。本遺構の階段が石段であることを併せて考えれば、この地下室には頻繁な出入りの必要性があったことも予想し得る。本調査地点が膳所であったことを踏まえて、現時点では食料貯蔵庫であった可能性を指摘したい。今後、江戸内外の類例資料を比較検討していく必要がある。

遺構と絵図面との比較をもう1遺構について試みたい。SK162は東西にある2つの板状の石を挟み、中央部が約3mにわたって一段低くなっている。しかしこの構造のみでは、本遺構がどのような性格のものであるかは不明である。絵図面の本遺構付近をみると、SK162と直交するように南北方向の廊下が描かれている。そこでこうした御殿の廊下をくぐり抜ける立体交差点的な役割であったことが考えられよう。絵図面に描かれている建物を縦横に走る廊下に加えて、実際にはこうした日常用の通路も設けられていたのではないだろうか。御殿空間の様相は、絵図面に描かれている以上に入り組んだものであった可能性もある。

この溶姫御殿の構造であるが、本調査では調査区東側A面に建物に伴う礎石が検出された。前述したように礎石の構造には2種類認められ、こうした構造の違いが何に起因するものであるかを今後検討していかなくてはならないが、その際にはSK122やSX103といった隣接する他の遺構との位置関係も参考となろう。

2. B面の調査

調査区西側の一部が富士山（椿山）の存在していた場所に位置していたが、富士山もしくは富士権現に関連する遺構は認められなかった。しかし調査区西側B面の西端から検出されたSK641,642の覆土の様相が、他の遺構と大きく異なっているため、富士山築造に何らかの関わりがあるかどうかを検討していく必要もあろう。

B面の遺構の中ではSK505も注目される遺構の一つである。本遺構からは多量の金箔瓦が出土した。これらの金箔瓦が本郷邸のどの屋敷に葺かれていたかは不明であるが、金箔瓦には被熱の痕跡はみられないことから、火災による一括廃棄ではなかったことがうかがえる。火災によらずに瓦を廃棄する、即ち屋敷を取り壊すということが、どのような歴史的背景においてなされたかは今後の課題である。下屋敷時代の本郷邸では將軍の御成が行われたこともあるが、果たしてそれに関連する御殿であったのだろうか。あるいは金箔瓦を出土する遺跡がおしなべて17世紀代であることからすると、建築様式の上で金箔瓦を多量に廃棄するような大きな変化がこの時期の前後にあったのだろうか。いずれにせよSK505から出土した多量の金箔瓦は、宮崎勝美が述べているように、加賀藩下屋敷が「呼称は下屋敷であっても、相当な殿舎の構え」であったこと（宮崎1990）をうかがわせる資料である。

本調査地点は加賀藩本郷邸の中でも、特に御殿空間に位置する地点であった。60地点に届かんとする本郷構内での発掘調査においても、加賀藩邸の御殿空間を対象とした調査というのは数

少ない事例となる（調査地点一覧参照）。そうした意味で当該地点の調査の成果は、御殿空間の構造や時間的変遷といった御殿空間のあり方に関して新たな知見を加えるものである。杉森哲也の研究によれば、溶姫御殿には主な女中だけでも100人がおり、更にその女中に付き人が付くなどして約300人の女中が暮らしていたという（杉森1990）。女中のランクである「御末」と釘書きされた肥前製磁器碗もまた、そうした溶姫御殿の暮らしを物語る資料であろう。今後の分析によって、奥御殿である溶姫御殿の様相の一端を明らかにしていきたい。（追川吉生）

【参考文献】

- 大成可乃 1997 「「瓦積みの穴蔵」について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 杉森哲也 1990 「文献・絵図史料から見た加賀藩本郷邸」『山上会館・御殿下記念館地点』
- 宮崎勝美 1990 「加賀本郷邸とその周辺」『山上会館・御殿下記念館地点』
- 堀内秀樹 1999 「医学部教育研究棟地点新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 吉田伸之 1988 「近世の城下町—江戸から金沢へ—」『週間朝日百科 日本の歴史 別冊歴史の読み方』

3 文系4研究所等暫定建物新営に伴う埋蔵文化財試掘調査略報

試掘調査期間：平成11年12月16・17日

試掘調査面積：16 m²

調査担当者：埋蔵文化財調査室 成瀬晃司

I. はじめに

東京大学では、龍岡門脇テニスコートに文系4研究所等の共同利用暫定建物の建設を予定している。当該地は、文京区 No.47『本郷台遺跡群』として登録されている遺跡範囲に該当するため、施設部からの依頼を受け、埋蔵文化財調査室が試掘調査を実施した。

試掘調査は、遺跡の残存状況、現表から遺構面までの深度の確認を主目的とし、建設予定範囲 18.9 × 10.8 m (612.3 m²) 内に 2 × 2 m のトレンチを 4 ヶ所設定し、調査を行った (図5)。以下に各トレンチの調査結果を報告する (図6)。

II. 調査の成果

第1トレンチ 本トレンチ内の土層堆積状況は、以下の通りである。GL-40 cmで、第1整地面を確認する。第1整地面までの盛土層には、煉瓦片などが含有され、明らかに近代以降の所産であることが確認された。GL-90 cmで、第2整地面を確認する。トレンチ西南部に本整地面を切り込み面とする遺構が検出されたが、本遺構の覆土は、10～40 mm大の玉砂利と微砂粒で構成される砂礫層によって充填されるという特異な様相を示しており、積極的に江戸期の遺構と判断できる要素が確認されなかった。GL-120 cmで第3遺構面を確認する。本整地面上には、約10 cmの厚さを測る焼土層が堆積し、整地面表面にもスス状の炭化物で覆われていることから、火災による廃絶面と断定できる。火災年代に関しては、焼土層中に遺物が全く含まれておらず断定はできないが、西壁より検出された本整地面に帰属する礎石が17世紀代に多用された凝灰岩を使用していること、整地面を構成する土層が、比較的プライマリーな沖積層を利用していることから、17世紀代(例えば、天和2年・元禄16年など)の火災の可能性が高い。第3整地層の下層は、地下室の天井が陥没したものと考えられる巨大なロームブロック、その地下室の覆土と続き、地山を確認することはできなかった。

第2トレンチ 本トレンチの土層堆積状況は、以下の通りである。GL-40 cmで第1整地面を確認する。本整地面を切り込み面とする土管溝、配管溝が確認されている。本整地面以下には顕著な整地面はなく、GL-100 cmでロームに達する。確認されたローム層は、ハードロームで、江戸

期における整地作業の所産である。

遺物の出土状況は、第1整地面までの盛土層は、煉瓦片などを含む。第6層より、17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる肥前産陶器・刷毛目片口鉢の口縁部片が1点出土している。

第3トレンチ 本トレンチの土層堆積状況は、以下の通りである。GL-40cmで第1整地面を確認する。トレンチ南側で本遺構面から切り込んでいる攪乱が確認されている。第2遺構面は、GL-90cmで確認され、第2トレンチ同様ハードルームまで削平された地山上に、砂利層を構築している状況が、一部で認められた。ルーム面では、ピット2基と方形土坑（地下室か）1基が検出されたが、方形土坑は、砂利面から切り込んでいる。遺物は、第1整地層下の盛土層（第2層）より堺搦鉢の口縁部片が1点検出されている。

第4トレンチ 本トレンチの土層堆積状況は、以下の通りである。GL-30cmで第1整地面を確認する。本整地層は、微砂粒を多量に含有する暗褐色土で形成される。第2整地面はGL-60～70cmで確認され、5～10mm大の玉砂利を主体とした整地層が形成されている。さらにGL-80cmでハードルームまで削平された地山が確認されたが、ルーム面から切り込んでいる遺構が1基存在しており、これを第3整地面とする。第2整地面上の盛土層（第3層）から1680～1700年代頃に位置付けられる肥前磁器の皿底部片が検出されている。

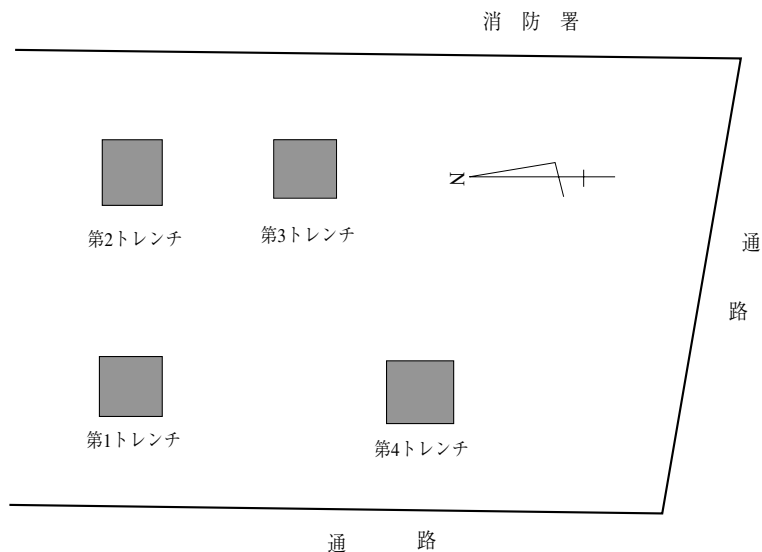


図5 トレンチ配置図 (S=1/250)

Ⅲ. まとめ

各トレンチにおいてGL-約40cmの位置より、整地面（第1整地面）が確認された。この整地面より土管・配管溝などが掘り込まれていることが確認された。それらは、昭和4年以降の学内建物配置図に存在する官舎に帰属する埋設物と考えられ、下限は官舎存在期間に求められる。それに対し、上限は、前田侯爵邸の東縁部に当たり、かなり低い土地利用形態であったことが想像され、江戸期の生活面からほとんど嵩上げされていない可能性が指摘できる。第1整地面下の盛土層から近代遺物の出土が皆無であることもそれを傍証する根拠の一つである。よって、今回の試掘調査の所見では、第1遺構面の上限年代を積極的に提示する根拠が乏しいのが現状である。

この結果を踏まえて、確実に近世の遺構面と考えられる第2遺構面までは、現表から約70cmあること、開発建物が軽量鉄骨による暫定建物であること、布掘りによる基礎深度が、遺構面まで達しないことなどの文京区による行政判断が下され、調査室員の立ち会いのもと基礎工事の根切りを執り行うことで合意した。 (成瀬晃司)

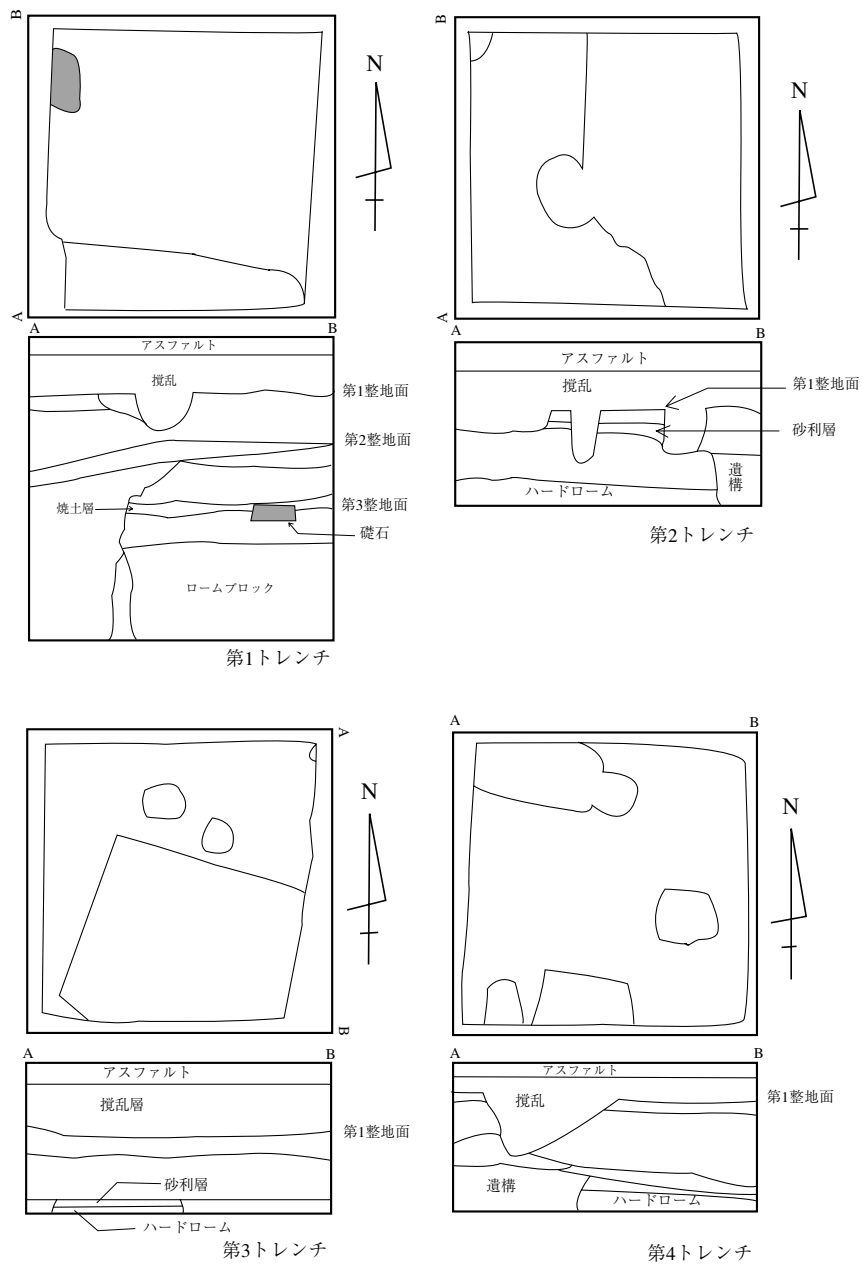


図6 試掘トレンチ平面図・断面図 (S=1/50)

4 受変電設備棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

I. 調査の経緯と経過

東京大学本郷構内の遺跡・医学部附属病院中央診療棟（Ⅱ期）受変電設備棟地点（略号 YM）は工学部 3 号館の東に位置する。埋蔵文化財調査室は施設部より医学部附属病院中央診療棟に関わる受変電設備棟新営に伴う遺跡に関する照会を受けた。調査地点周辺は江戸時代の水戸藩邸に該当し、近世の遺跡の存在が予想されることから、平成 12 年 2 月 3・4 日に試掘調査を行なった。その結果、江戸時代の遺跡を確認した。建設予定地は東京都の遺跡地図に記載された本郷台遺跡群の範囲に含まれることから、事前調査を平成 12 年 2 月 5 日から同年 3 月 31 日まで行った。調査は寺島孝一の指導のもと原祐一が担当した。調査面積は 300 m²である。

II. 調査の結果

近代、江戸時代の遺構 50 基を検出した。出土遺物は陶磁器、土器、金属製品、漆器等、遺物収納箱で 120 箱が出土した（写真 14）。

近代

表土掘削時、陶磁器類をはじめとする生活用具の他、内面に「mL」（ミリリットル）表示のある磁器製計量容器、ガラス容器など実験用具と考えられる遺物が出土した。

SK02 調査区中央部に位置する土坑である。確認された範囲で長軸 15 m、短軸 7 m、深さ 2.5 m を測る。覆土は焼土、ロームブロックが主体であった。出土遺物はレンガ、近代以降に製造された陶磁器類の他、江戸時代に生産された陶磁器類、梅鉢紋の瓦、寛永通宝真鍮四文銭、文久永宝等が出土した。

江戸時代

現地表面から深さ 2 m で江戸時代の遺構を確認した。遺構の検出状況から 5 枚の生活面（A～E 面）を確認した（写真 15）。

1) A 面

A 面は調査区全体で確認された。出土遺物の生産年代から江戸時代末の生活面と考えられる。礎石、土坑などの遺構を検出した。面の標高は 12 m であった。

2) D・E 面

D・E 面は北部分で確認された。検出した遺構は、溝状遺構が中心である。17 世紀に生産された焼塩壺、陶磁器が出土した。

Ⅲ. 成果と課題

江戸時代末の本地点は水戸藩邸の南端、加賀藩との地境付近に位置する^(註1)。水戸藩邸に関しては現在のところ藩邸内の状況を示す絵図等の史料は見出せない。そのめ、水戸藩邸内の状況を知る上で発掘調査の成果蓄積、隣接する加賀藩邸の状況、近代以降の地図の検討は重要である。今回、江戸時代末の遺跡の状況と地図から読み取れる地形の比較検討を行なった。江戸時代末と考えられるA面の標高は12mで陸軍参謀本部測量図(明治16年測量)の標高と一致する。また、隣接する工学部基幹整備共同溝その他地点(工学部共同溝地点)で行なわれた盛土の状況と年代から、陸軍参謀本部測量図は江戸時代末の遺跡周辺の地形を反映していることが明らかになった。

遺物では、寛永通宝真鍮四文銭が注目される。真鍮四文銭はアイソトープ総合センター、原子力研究総合センタータンデム加速器部門で材質分析を行なった。その結果、材質分析と文書の検討から明和期鑄造貨幣、文政期鑄造貨幣が明確に区別できた。真鍮四文銭は、18世紀中頃から19世紀の遺構を評価する上で重要な遺物であること、近世の銅精錬技術、鑄造技術を明らかにする上で重要な遺物であることが明らかになった^(註2)。(原 祐一)

註

1. 1840～45年とされる加賀藩「江戸御屋敷絵図」(金沢市図書館所蔵清水文庫 特18.6-27-1)、陸軍参謀本部測量図(明治16年測量)、帝國大学平面図(明治19年)等の絵図・地図と、理学部7号館地点で検出した加賀藩八筋長屋の位置関係から総合的に判断した。
2. 小泉好延、伊藤博之、原祐一 2000「江戸期四文銭の科学的研究」産業考古学会第24回大会総会研究発表講演論文集、原祐一、小泉好延、伊藤博之「近世の真鍮四文銭における亜鉛の研究」同上、小泉好延、伊藤博之、原祐一 2001「寛永通宝真鍮四文銭の研究」日本考古学協会第67回大会発表要旨

写真図版

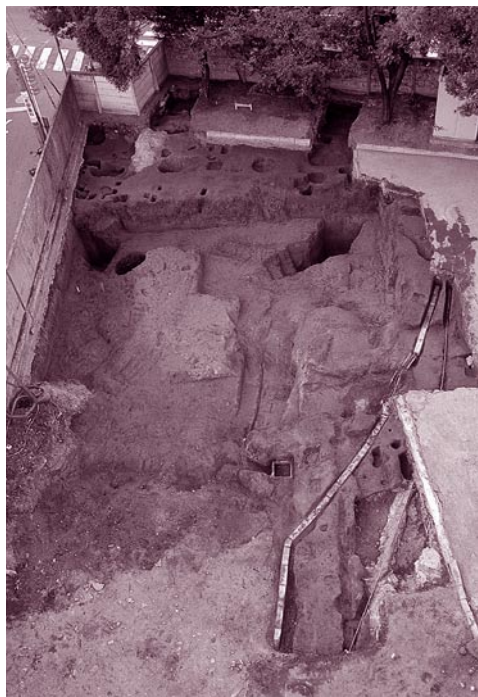


写真1 工学部強風シミュレーション風洞実験室調査地点完掘状況

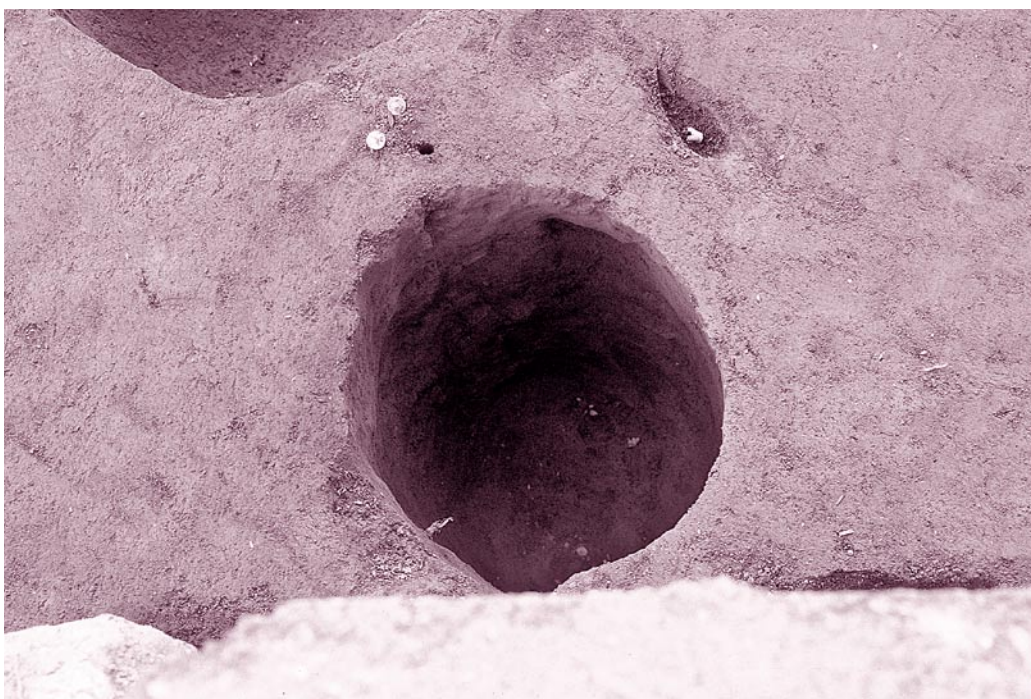


写真2 工学部強風シミュレーション風洞実験室 SE60 遺構（井戸）



写真3 SX103



写真4 SU107 出土陶器



写真5 SU107 出土磁器碗

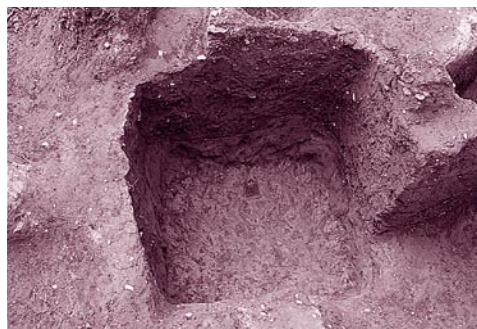


写真6 SK110



写真7 SK110 出土軒丸瓦



写真8 SK122

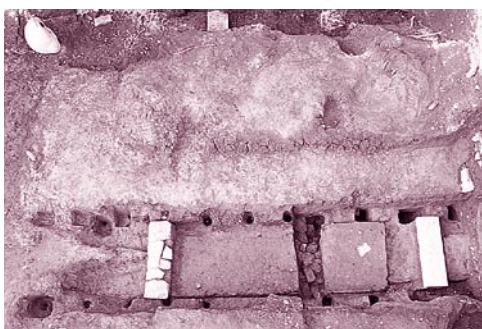


写真9 SK162



写真10 SK505 金箔瓦出土状況

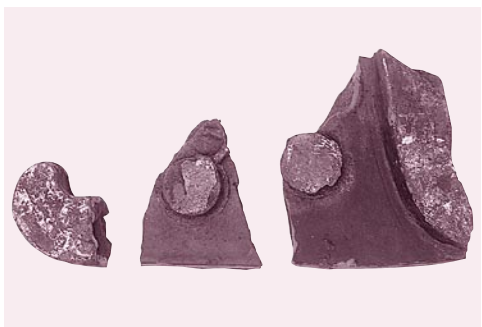


写真 11 (上・下) SK505 出土金箔瓦

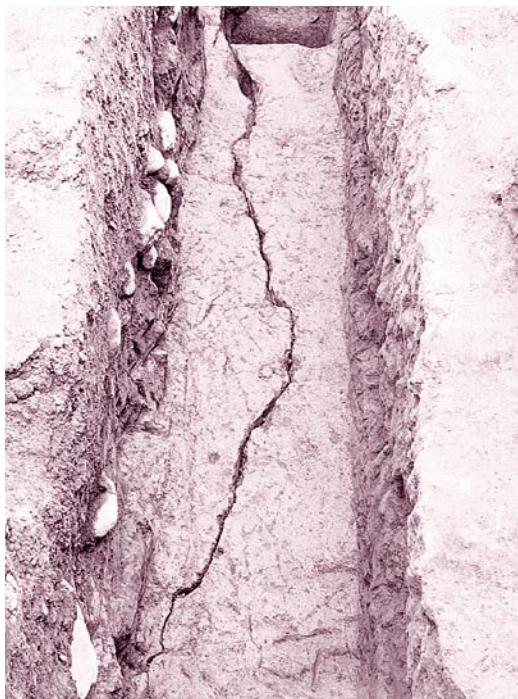


写真 12 SD428



写真 13 SU268



写真 14 受変電設備棟地点完掘状況



写真 15 受変電設備棟地点 SK09 遺構遺物出土状況

第Ⅱ部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

1998～1999年度室員活動内容	35
東京大学埋蔵文化財調査室組織	39

1998～1999年度室員活動内容

成瀬晃司

執筆

1999年3月20日

「産業考古学」79-84頁

「都市考古学」139-144頁

「歴史考古学」200-205頁

安斎正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論Ⅰ』同成社

1999年7月1日

「近世研究の動向」『日本考古学年報』50（1997年度版）43-49頁

1999年12月11日

「17世紀代の江戸における「供膳具」の様相と上方との比較」『関西近世考古学研究』Ⅶ

27-40頁 長佐古真也共著

講演

1999年6月5日

「江戸遺跡研究の現状と成果」浦和市常磐公民館歴史講座『八百八町の考古学』

1999年6月12日

「掘り出された大名屋敷」浦和市常磐公民館歴史講座『八百八町の考古学』

1999年6月19日

「江戸の陶磁器－変遷と流通－」浦和市常磐公民館歴史講座『八百八町の考古学』

1999年7月6日

「陶磁器からみる江戸の食文化」くらしき作陽大学「比較食具論」特別講義

1999年12月3日

「考古学からみた江戸の暮らし」川崎市中原公民館歴史講座

研究発表

1998年5月23日

「加賀藩本郷邸長屋跡」（日本考古学協会第64回総会 特別発表『江戸の考古学』）

1998年12月12日

「江戸遺跡における17世紀代の「供膳具」の様相」（第10回関西近世考古学研究会大会 長佐

古真也共同発表）

堀内秀樹

執筆

1998年9月19日

「江戸遺跡出土の金銀貨」『出土銭貨』10 115-123頁

1999年3月31日

「統制番号」のついた陶磁器について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2 211-216頁

1999年9月1日

「江戸遺跡出土の清朝陶磁」『貿易陶磁研究』19 1-22頁

1999年12月11日

「出土播鉢からみた様相差」『関西近世考古学研究』Ⅶ 91-100頁

1999年12月22日

「東京大学本郷構内の遺跡出土磁器編年」『第1回考古科学シンポジウム発表要旨』 89-100頁

2000年3月31日

出土陶磁器の様相－33号遺構、68号遺構出土陶磁器類を中心に－」『本郷元町Ⅳ 分析各論編』
35-45頁

講演

1999年12月5日

「江戸遺跡出土の陶磁器」都民カレッジ講座『考古学から見た江戸－ニューヨーク・ロンドン・
アムステルダムなどと比較しながら－』

研究発表

1998年7月10日

「消費遺跡出土陶磁器類の編年について－江戸遺跡を中心に－」（東北中世考古学会第4回大会）

1998年9月19日

「江戸遺跡出土の清朝陶磁」（第19回貿易陶磁研究集会）

1998年12月12日

「江戸遺跡出土の「調理具・貯蔵具」（第10回関西近世考古学研究会大会）

原 祐一

執筆

1999年3月31日

「東京大学本郷構内の遺跡出土木製品1 工学部1号館地点出土の漆碗」『東京大学構内遺跡調査
研究年報』2 269-287頁

1999年12月1日

「東大構内遺跡出土のキセル材質及び亜鉛輸入－江戸時代の真鍮製造と亜鉛輸入－」『第8回原

子力研究総合センターシンポジウム発表要旨』 227-231 頁 (原 祐一・伊藤博之・小泉好延)

1999年12月22日

「東京大学本郷構内出土のキセル材質および亜鉛輸入」『第1回考古科学シンポジウム発表要旨』
39-46 頁

「東京大学本郷構内遺跡(旧加賀藩邸)の磁器上絵の分析」『第1回考古科学シンポジウム発表要旨』
101-103 頁 (小泉好延・小林紘一・堀内秀樹・成瀬晃司・原 祐一・大成可乃・中野忠一郎)

『日本における真鍮の歴史』(伊藤博之・小泉好延・原祐一)

1999年12月25日

「近世の遺跡から出土したキセルの材質分析」『東京大学 RI 総合センターニュース』30-3 2-4 頁
(小泉好延・伊藤博之・原 祐一)

研究発表

1999年6月26・27日

「東京大学本郷構内遺跡(旧加賀藩邸)から出土したキセルの材質分析」(日本文化財科学会第
16回大会 奈良教育大学 原 祐一・寺島孝一・小泉好延・伊藤博之)

1999年6月26・27日

「東京大学本郷構内遺跡(旧加賀藩邸)から出土した磁器上絵の材質分析」(日本文化財科学会第
16回大会 奈良教育大学 小泉好延・小林紘一・堀内秀樹・成瀬晃司・原 祐一・大成可乃・
中野忠一郎)

1999年9月25日

「東大本郷構内出土のキセルとその科学分析」(唐沢考古例会)

1999年11月13日

「近世の遺跡から出土したキセルの材質分析」(産業考古学会1999年度全国大会(龍ヶ崎)流通
経済大学 小泉好延・伊藤博之・原 祐一)

1999年12月1・2日

「東大構内遺跡出土のキセル材質及び亜鉛輸入」(第8回原子力研究総合センターシンポジウム
ポスターセッション 東京大学山上会館 原 祐一・伊藤博之・小泉好延)

1999年12月22日

「東京大学本郷構内出土のキセル材質および亜鉛輸入」(第1回考古科学シンポジウム)

2000年3月15日

「近世の真鍮製造と亜鉛輸入」(江戸遺跡研究会第74回例会)

大成可乃

研究発表

1999年4月16日

「東京大学構内遺跡病棟地点出土陶磁器の紹介 — 寛文五（1665）年を下限とする整地層出土資料から —」（江戸陶磁器研究会）

追川吉生（1999年度）

執筆

1999年9月30日

「浄法寺漆器椀における形態と文様に関する一考察 — 漆文化財収蔵庫収蔵漆器椀における文様構成を中心に —」『東京都立大学考古学報告4 人類誌集報1999』12-37頁

2000年3月31日

「18世紀前半における漆器椀の諸形態 — 明治大学記念館前遺跡出土の漆器椀を中心に —」

『明治大学記念館前遺跡発掘調査報告書』190-207頁

研究発表

1999年11月24日

「東京大学総合研究棟建設に先立つ発掘調査」（江戸遺跡研究会第73回例会）

東京大学埋蔵文化財調査室組織表（1998～1999年度）

室長 今村啓爾

助教授 寺島孝一

助手 武藤康弘（～98.12）
成瀬晃司
堀内秀樹
原 祐一
大成可乃
追川吉生（99.4～）

事務補佐員 安芸毬子 池田奈津子 今井雅子 大貫浩子 香取祐一 川原良子
坂野貞子 宮本直子 野村 遊 柳 絢子

第Ⅲ部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要3

- 1 どんぶり考 附・わりばしの始まり …………… 43
- 2 東京大学医科学研究所（旧大村
藩下屋敷）から出土した鉛塊について …………… 66

1 どんぶり考 附・わりばしの始まり

寺島 孝一

はじめに

『江戸遺跡研究会』会報に、「どんぶり問題・わりばし思案」として数回に分けて寄稿したことがあった。それは文献の紹介のみで、意をつくせないところもあったし、またその後に新しく見つけた史料もいくつか出てきた。それらの史料によって、江戸時代後半に「どんぶり」とよばれた器の輪郭が、おぼろげながらつかめたような気もするが、文献のあたりかたも不十分で、私自身納得できるだけの結論は得ていない。ここでは中間報告ということで誌面を汚させていただき、諸兄の御教示を得たいと願っている。

また、『会報』に示した挿図類は、なるべく使わないこととしたため、合わせてご覧いただければ幸いである。

I. 「和談風雅の席」の器

滝沢馬琴の兄である羅文が天明年間（1780年代）に書いた『俳諧古文庫』のなかに次のような一文がある。

銘類

井 鉢ノ銘

近世^{ドンブリ}井といふ器出て、あまねくもてはやさる、^{セウ}家諸州の高器にもあらず、貴となく賤となく、大用をなす、其かたち小なるは、二三寸の丸みを取、高^ウ四五寸を過ず、大たるは独楽居の摺り鉢に類し、底はほそみて、ひらきたる処尺にも足れり、其色其模様ともにさまざまありて、朝^ウには茶うけの饅頭をに入れ、夕べには宴の滋味をかぞふ、又松魚の三杯酢^ウ杯入る^ウ時は、北条どの^ウ手料理も思ひ出らる^ウよ、何により彼により、和談風雅の席にて箸とらせ、口ぬらさせんとする時は、よくその場を取れる器、^{ソノカミ}当時是を第一とせん、

これによれば、直径は10cm未満から30cmを越えるものまであって、色や模様はさまざまである。そして、底が細くて口が開いているのだから、朝顔の花や、ラッパのような形をしていたのだろう。

そして、朝には饅頭をもち、夕べの宴では、カツオの三杯酢などさまざまな滋味が、このどんぶりにもられており、今の私たちが「どんぶり」という言葉から思いうかべるものとは、用途・形ともに、ずいぶん異なっていることがわかる。

この一文を手がかりにして、江戸時代にみられるどんぶりが、一体どのようなものであったかをいささかなりとも明らかにしてみたい。

II. 料亭または宴会の料理

江戸料理の有名店で現在までつづく「八百善」の四代目当主、栗山善四郎の書いた『江戸流行料理通』(文政五年 - 1822)には、さまざまな料理のなかに、「井物の部」という項がある。第二編では、春夏秋冬それぞれの献立があるが、そのうち春の部を引いてみれば、

春	布目作りいか	白魚	へぎさざえ	割りまで貝
	若蓆	卵衣てんぷら	新ごぼう	粒松露
	銀杏さわさわ煮	菊若葉衣揚げ	笠松茸	つくし
		大根おろし	土佐煮	蓆味噌和え
		煮返し醤油		

となっている。さらに第三編の「四季井物の部」では、

篠むき独活	たけのこの穂	丸むきむかご	碇防風	黄菊
糞形切り松露	ちよろぎ	篠むき蓮根	もずく	はじきぶどう
	仏手柑	独活芽	湯餅糞形切り	おろし大根
算木切り松茸	からし和え	ごま味噌和え	大根みじん切り	酢醤油
木の芽和え			はじきぶどうのり酢敷き	

などの料理がもられたようである。

『俳諧古文庫』は器自体の名前として「どんぶり」を用い、『料理通』では容器を含めた料理全体のことをいっているわけだが、いずれも私たちが今「どんぶり」といっているものから連想される中味とは、大きくかけはなれていることがわかる。

大田南畝(蜀山人)が『俗耳鼓吹』に記している料理のなかにも、どんぶりが登場する。

天明元年(1781)十月十七日、南畝は小石川の布施胤致(狂歌の仲間で狂名山手白人、旗本)の家によばれ、もてなしを受ける。相客は万年氏(旗本)、江戸有数の料亭である望汰欄主人の祝阿弥、文竿(裕福な町人らしい)である。

そこで出された料理は以下のとおりである。

たばこ盆	蠟色火入宣徳
	竹はいふき 手あぶり

茶 肥後ほしの出し茶 茶わん南京染付
 盃 二つ組 地まき系 蓋台 銘月すり出しまき系菊 尾州寸法
 牡丹ちらしまき系 膳琉球もやう牡丹 鯛切身白みそふき
 吸物 箸あらゝ木五角
 古渡南京青地中皿 銘々口取 朝日ほう 二色せうが 塩梅酢
 琉球 南京染付どんぶり 車系び あはび塩もみ
 大丸盆 同断 どんぶり 鯛ぬた 唐がらしみそ
 古渡南京染付 つくしよめな みつば ごまけし
 平鉢 くるみせうゆ 古肥前小皿 銘々
 八幡木地蠟色いつかけ
 大硯蓋 大かまぼこ一色 あられ塩 盃品々盆かざり
 赤絵南京
 大鉢 鯉平作り ちよろぎ 黒くわい いり酒入
 木地 吸物 鱸^{すずき} こんぶ こせう 古渡南蛮壺
 (以下延々と続くが、長くなるので省略する)

これが、布施氏の家内で料理したものが、あるいは料理店からとりよせたものかは記録からはうかがえないが、このような多種多様な料理であれば、専門店からの仕出しだったのだろう。

武陽隠士の『世事見聞録』(文化十三年序)に、

今此料理茶屋の繁昌成事、譬へば同志のもの十人二十人、一群にて不意に参り、金五両拾両の価なる料理を好むに、何時も差支へなく即時に調ふなり。(中略)此の如きもの江戸中に所々ありて、又仕出しと云うて、何百人前にも誂へ次第、いづれまでも持ち出すなり。

とあって、「料理茶屋」の繁盛と、仕出し料理の盛んなことに憤慨している。

さて、大田南畝が賞味したこの盛りだくさんな料理のうち、「琉球大丸盆」のなかに、平鉢・小皿(銘々皿)とともに、南京染付のどんぶりが二つある。南京染付というのは染付の磁器のことであるようだ(中国産か、伊万里産かははっきりしないが)。

このなかにみえるどんぶりの中味は、一つが「車系び、あわび塩もみ」、もう一つが「鯛ぬた、唐がらしみそ」と、いま私たちが「どんぶり」から連想する内容とは全くことなることがわかる。

Ⅲ. 絵画にみえる「どんぶり」?

さて、滝沢馬琴と親交があり、馬琴の読本などの挿絵をよく手がけた歌川豊広(文政十二年没)の浮世絵「豊国・豊広 両画十二候・六月」は、四条河原の床における宴会(夕涼み)を描いている。

図7 「豊国・豊広両画十二候・六月」(歌川豊広)

河原に張り出して作った床の上での宴会であるから、さきにあげたような「フルコース」が並べられているわけではないが、そこに、布施氏宅の料理の大丸盆をそのまま絵にしたような光景が描かれている(図7)。

寸法が書かれているわけではないのではっきりとはしないが、周囲の人々との比較で見れば、大丸盆の直径は三尺(90センチ)ほど、その中に大鉢が二つと、大皿一つが置かれ、中には料理がもられている。鉢の脇には、小皿が四~五枚重ねておかれ、また、大盆の縁には箸が数膳置かれている。

さらにその横には足つきの折敷があり、その上にも大きな鉢がのっている。

大田南畝の『俗耳鼓吹』は文字による記録で、もう一方は浮世絵であり、年代もややずれるものの、このように比較してみれば、両者がよく似かよっていることがわかる。とすれば、『俳諧古文庫』や『俗耳鼓吹』にみえる「どんぶり」が、浮世絵にみられる大きな鉢に対応しているであろうことは、ほぼ間違いないようにみえる。

さて、後でもふれるが、喜田川守貞は『守貞謾稿』鰻飯の項で、「葬形の并鉢」といっているし、冒頭にあげた『俳諧古文庫』では「そこはほそみて、ひらきたる処尺にも足れり」と、やはり朝

顔形を連想させるような表現をしている。

ところが、豊広の浮世絵をみると、盆の上の一つと、台付き折敷の上に乗るものは上が開く朝顔形をしているものの、盆の上のもう一つの「どんぶり」は口がまっすぐに立っている。

さらに、大田南畝の『俗耳鼓吹』の献立をみれば、「南京染付どんぶり」の少しあとに「赤絵南京大鉢」が出てくるから、どんぶりと大鉢の区別があったことは間違いない。もう一つ、『俳諧古文古庫』では大小さまざまのどんぶりがあるといっている。

だから、厳密に定義をすることはとても難しいのだが、私たちが大鉢とでも呼ぶ一群の器の中に、「どんぶり」と呼ばれたものがあったことは間違いなからう。

この浮世絵に限らず、江戸時代後期の草双紙などの絵画で、宴会の場面では、このような大きな鉢が盆の上、あるいは折敷などのうえに載せられ、宴席を盛りあげている例は数多く見られるのである（『江戸遺跡研究会会報』参照）。

以上見たものでは、絵画と文献が全く別のものだから、もうすこし捜してみると、絵と「どんぶり」の文字が対比できるものがある。

たとえば、四方山人（太田南畝）の『料理ノ献立 ^{あたま} 頭てん ^{てんにくちあり} 天口有』（天明四年 - 1784 刊）で、大きな鉢などが並んだ絵の詞書きで、

すいものあんぱい、ぐんばいうち八、どんぶるかうめう（井高名）ほまれをあらわさん

と、「どんぶり」を自慢しているから、そこに描かれている大きな鉢が、どんぶりと呼ばれていたことはまちがいない（図8）。

また、『俳諧古文庫』にある「朝夕には茶うけの饅頭を入れられ」とされる使いみちとしては、たとえば山東京伝の『天慶和句文』（天明四年刊）に、急須と湯飲み茶碗の横に添えられた鉢のなかに、饅頭のようなものが盛られている。その添え書きに「最中の月で、煮花をあがれ」とある場面などが、ぴったりとあいそうである（図9）。ちなみに、「^{もなか}最中の月」とは、新吉原仲の町の有名な菓子店である竹村伊勢でつくられたもの、また煮花とは、煎じたお茶のことである。

さらに、加賀の豪商である銭屋五兵衛の日記である『年々留』をみても、どんぶりをしばしば購入している。いくつかをあげてみれば、

文政十二年（1829）	染付花鳥井	五百七十五匁
天保十年（1839）	青呉洲井	二百三八匁五分
	七宝井	七百六十八匁八分
	三嶋井	三百七十八匁八分
	井戸脇井	二百五十八匁五分

などがある。一両が銀六十匁とすれば、一つの井が四両から十二両以上と、かなり高額であった

図8 『料理 / 献立 頭てん天口有』より

(東京都立中央図書館加賀文庫所蔵)

図9 『天慶和句文』より

(東京都立中央図書館加賀文庫所蔵)

ことかわかる。

そしてこの記述をみると、「中に入れられるもの」または「器が使われる場面」によって、どんぶりと鉢の名前を使い分けるという解釈では無理があり、やはり、器自体にどんぶりとしての特徴があるのかなとも思えるのである。

ここまでいくつかの記録を見てきたが、少なくとも、天明年間から天保年間の約六十年にわたり、「どんぶり」が一種の高級食器として、料亭の配膳をにぎわし、花街の座をもりたて、また貴重な財産としても扱われていたことがわかるだろう。

さて、天明期に「どんぶり」が出てきたといったが、ではそれ以前はどのような器を使っていたのだろうか。

花街などでの宴会の様子を描いているものをみると、たとえば、延宝六年(1678)に版行された『吉原恋の道引』では、後のどんぶりに相当する器としては重箱のようなものが描かれている。これ以外でも、十七世紀の後半から十八世紀前半の絵画では、宴席には重箱というのが普通であったらしい。またそれに加えて大きな皿が描かれていることが多いようだ(図10・11)。

そして十八世紀後半にどんぶりに変わったと言えれば、『俳諧古文庫』の「近世井といふ器出て、あまねくもてはやされる」の一節によく符合してよいのだが、なかなか思うようにはゆかない。

1 どんぶり考 附・わりばしの始まり

図 10 『野郎虫』より (国書刊行会・『風俗画大系 5a』)

図 11 『吉原恋の道引』より (国立国会図書館蔵)

たとえば、萬治年間（1660 頃）から元禄期の始めに活躍した菱川師宣の絵画をみると（上の『恋の道引』も師宣画のようだが）、わずかではあるが、宴席にどんぶりのような器がみえるし、元禄年間に活躍したといわれる杉村治兵衛の浮世絵にも、台の上に「どんぶり」が載っているものがある。また十八世紀の前半に活躍した宮川長春も、台の上に「どんぶり」を載せた絵を残している。

さらに、正徳六年（1716）に京都で刊行された『世間娘容気』（其碩作）の挿図にも、重箱とならんで台に載った「どんぶり」が描かれている（図 12 ~ 14）。

上より

図 12 『世間娘容気』

（江島甚硯・八文字舎本五種より）

図 13 『大江山』

（菱川師宣）

図 14 『挑み』

（村田治兵衛）

さて、最初にあげた文献で、「近世井といふ器出て」とかかれ、このころに「どんぶり」という言葉がはじめて使われたような印象をうけるが、じつはこの言葉は元禄時代にはすでに使われていたようだ。

艸田子三径の『男重宝記』(元禄六年—1693)のなかで、「料理に用いる諸道其盡」に、「井」がみられるし、また『萬寶全書』(元禄七年、版行享保三年 1718)には、「高麗焼之類」の項に「金海(中略)どんぶり鉢内に金の字有、或はなきも有」とある。

このことから、井(あるいは「どんぶり」という言葉)は、かなり古くから使われていたことがわかる。しかしその普及の程度(器自体か、「どんぶり」という呼び方かは、難しい問題だが)は、わずかであったことが窺われるのである。

しかし、江戸と上方を問わず、宴席を描いた絵画をみていると、古くは重箱状のものが多く、次第に「どんぶり」が使われる例が多くなる傾向は、見てとれるようで、文献にも「どんぶり」が多く出てくるのは、18世紀後半以降のように思える。

だから、天明年間(あるいはこれよりいくぶん前)にどんぶりが出現したと決めるのは、間違っているともいえない(実際発掘で見つかる鉢類で、この時期にいちじるしい変化はないようだ) ほぼこの時期に「どんぶり」という名称が広く意識され、また、さまざまな席で利用されるようになったことは間違いないようだ。

IV. 高級「井」と庶民の「井」

寛政から天保にかけて(18世紀末～19世紀前半)の世相を描いた『寛天見聞記』(作者不詳)で、

予幼少の頃は、酒の器は、鉄銚子、塗盃に限りたる様なりしを、いつの頃よりか、銚子は染付の陶器と成り、盃は猪口と変じ、酒は土器でなければ呑めぬなどいひ、盃あらひとて、井に水を入、猪口数多浮めて・・・

蕎麦屋の皿もりも井となり、箸のふときは蕎麦屋の様なりと譬しも、いつしか細き杉箸を用い・・・

と、「盃洗い」と「蕎麦の容器」の双方を「井」としている。

このうち、「盃洗い」の使い方を絵画でみると、たとえば歌川国貞の浮世絵「唐人踊り」では、青磁とおもわれるおおきな深い碗(鉢?)を、四脚つきの蓋付き漆塗容器にとりつけて使っている。その中には磁器の猪口二つ(そのうち一つは水に浮かべてある)と、漆器あるいは土器の盃かわらけがやはり水に浮かんでいる(図15)。このように漆塗りの台をつけたもののほかに、台のつかない大きな鉢に水をはり、盃を浮かべている光景は、当時の絵画でよくみられるものである。

ここに描かれている「盃洗い」は、口が外側に大きく開くような形ではないから、必ずしも底がすばまり口が開く、さきへのべた「朝顔形」のものだけが、どんぶりといわれたわけではない。さきにもふれたが、国広の「両画十二候・六月」の、大盆のなかの器のうち、一つは朝顔

図 15 「唐人踊り」

(歌川国貞・静嘉堂文庫蔵)

形であるが、もうひとつは、カボチャのような、丸みをもった器なのである。

とすれば、今私たちが「大鉢」とよんでいる一群の食器類の、かなりの部分が当時「どんぶり」と呼ばれていた可能性がある。

また、天保七年(1836)に刊行された『春告鳥』に、

足なしの好風な台のうへにちいさきどんぶり小品井を種々ならべ、ひやうたんの清しすまどんぶりへ水を入れ、かはひらしき
ちよく猪口をニツばかりならべもちいで持出、・・・

と、「ちいさき井」という表現があるから、大きな鉢だけでなく、『俳諧古文庫』にもあるように、ずいぶん小さな鉢もどんぶりといっていた可能性はあろう。さらに「ひやうたん(瓢箪)の清しどんぶり」とはどういうものかよくわからないが、瓢箪形をしたどんぶりがあったのだろうか？さらに盃洗は、幕閣の部下へのもてなしの場面でも用いられている。

酒の節は伯耆守殿同様にて、引盃には侯得共、最初よりどんぶり江磁器の猪口三ツ四ツ浮して御差出有
之、... 川路聖謨『遊芸園随筆』九(天保七・八年)
だから、かがい花街などの華やかな席ばかりではなく、このような風習は当時かなり広く普及してい

たことがわかる。

さまざまな「どんぶり」の例をあげてみたが、当ても実際に使う人の感覚で使い分け、はっきりとした境界線はなかったのかもしれない。しかし、少なくとも今私たちが「どんぶり」から思いうかべる範囲より、ずいぶん広い意味で、この言葉が使われたことは確かなようだ。

V. 蕎麦屋の「どんぶり」

さて、つぎは「蕎麦屋の皿盛りも井となり」という部分である。

これが、いま私たちが普通につかっている「井」につながることはいうまでもあるまい。

今、器として「どんぶり」を使うものとしては、うどん・蕎麦、そして、うな井・天井などをはじめとするご飯ものの井などがあるろうが、江戸においては、蕎麦が比較的是やく「外食産業」として発達した。

新美正朝の『八十翁^{むかしばなし}囃昔話』(享保十七 - 1732)に、

寛文辰年(1664) けんどんうどん、そば切と云物出来、下々買喰ふ。中々侍衆の見る事もなし。近年は歴々の衆も喰ひ、結構なる座敷へ上るとて、大名けんどん杯と云て、拵へ出る。

とあり、当初は「下々」の食べるものであったようだ。

葎簧張りの簡単な店で売られたようだが、行商(振り売り)もあらわれ、幕府は火災を恐れこれを禁止する。たとえば貞享三年(1686)十一月には、

うどん^{うどん}餛飩、蕎麦切、何に不寄^{よらず}、火を持あるき商売仕候儀、一切無用

の禁令が出されている。

しかし、江戸での蕎麦の嗜好はおさえがたく、元禄期にはそばの名店もでき、また行商の夜そば売りも次第にその数をましていったようである。享保の中頃には蕎麦店がずいぶんできて、神田橋のあたりでは、餛飩^{うどん}を入れる桶へ蕎麦を入れて運んだという。

そばの普及のようすについて、三田村鳶魚はつぎのようにのべている。

小伝馬町二丁目に半兵衛といふ者があって、これが賭博宿であるところから、毎日毎晩蕎麦を取る。その度に不便であるからといって、井から膳からすべて取揃へて、小さい箱に入れて蕎麦屋に渡しておきまして、云付けてやれば、それに入れて持って来るといふことにした。それを見て牢屋の表門前の太田次郎左衛門といふものが工夫して、一人前づつ道具を箱に入れたのを拵へて売出した。大変これが喜ばれて市中にひろまったのですが、これから一八、二八、三八などといふことになって、中味の代金よりも入物が三四十倍もするような蕎麦屋道具を、皆が使ふやうになった、といふ云伝へがあります。これ

は延享、寛延度の話で、蕎麦屋の道具が綺麗になったのは、この頃らしいのです。

そして蕎麦をもる器の変遷として、

古いところは、蒸蕎麦は蒸籠に載せるし、さもないのは餛飩桶へ入れて来たのですが、それが大平盛りになり、皿盛りになり、井となり、蒸さない蕎麦でも見てくれのいゝやうに蒸籠に盛る、といふことになったものらしいのです。

(三田村鳶魚『江戸の衣食住』のうち「蕎麦屋の繁盛」)

と、蒸籠(餛飩桶) 大平 皿 井(あるいは蒸籠)という、変化を示している。これを見ると、蕎麦について「井」がはじめて使われたのが、「延享・寛延度」(1740年代)であるという。とすれば、このころには蕎麦をもるための、どんぶりとはばれる器があったことになる。

冒頭に引用した『俳諧古文庫』に「近世(ちかごろ)どんぶりという器出て」とあり、これが天明年間(1780年代)だから、約三四十年のへだたりがあるが、十八世紀中ごろから後半にかけてどんぶりという器、または呼びかたがあらわれたと見てよいのだろう。

文政八年(1825)ころの、山崎成美との「大名慳貧箱」の意味論争のなかで、滝沢馬琴は、

そば切の器物は、予が小児の頃は皿也、今は多くは平をも用ひ、小蒸籠、又井鉢をも用れど、・・・
盛り切り無情慳貧扱ひの義によりて、今の一膳飯、井飯の類、馬かた、駕かき、ぼてふりの商人等が、
をさをさ食ふ物ならば、・・・

と書いており、蕎麦の器(かけそば)に井が使われていたことがわかるし、また、馬方・籠かき・棒手振りなどの肉体労働者が、一膳飯・井飯の類を食べているといっているから、この一連の井は、さほど高級なものであったはずがない。

文化末年(1817頃)と推定されている歌川国貞の浮世絵「神無月はつ雪のそわか(惣嫁)」は、夜鷹(はだしの者もいる)が夜そばの屋台に集まって、そばをすすっている光景が描かれているが、今のそば屋のどんぶりよりやや大きめの器が使われている(図16)。

天保八年(1837)以来の見聞を克明にとどめた『守貞謄稿』では、

江戸は二八の蕎麦にも皿を用いず・・・横木二本ありて竹簀をしき、其上にそばを盛る、是を盛りと云、
盛りそばの下略也、だし汁かけたるを、上略して掛^かと云、かけは井鉢に盛る。天ぶら、花巻、しっぽく、
あられ、なんばん等、皆井鉢に盛る。

としており、さらに後の菊地貫一郎の『絵本江戸風俗往来』(明治三八年)では、

1 どんぶり考 附・わりばしの始まり

図16 「神無月にはつ雪のそうか」

(歌川国貞・静嘉堂文庫蔵)

通町には夜明かしという、酒飯を商う露店が、大店の軒下を借用して、年中毎夜店をはり、夜明け前まで商いする。これ行客の便利をはかってのこと。夜の寂寞になると、この店で皿・井を洗う音が高く響く。

とあって、現在の屋台店のようすとほぼ似通ったようすを見せている。

さて、ここまで紹介したのはいずれも外食産業である。だから、一般の家庭には入っていなかったかという、必ずしもそうとばかりはいえないようだ、

寛政八年（1796）刊の落し噺である『喜美談語』のなかの「三人生酔」に、

・・・夫から夫婦喧嘩になった。おれが留て、コレおみたちは毒だといふ物を吞せる事はない、おれがのむべい、と、どんぶりへついでひっかけた、・・・

という表現がみられるから、一般の家庭のなかにも、どんぶりとよばれた器が、入っていたことがわかる。

ただ、記録類をみていると、仕出屋や外食産業のほかには、やはり花街でよく使われたようで、同じ『喜美談語』の「からす猫」という話では、女郎屋の料理場のはなしとして、

親猫是を見て腹をたち、其晩八ツ時分に戸欄にいれてある肴を、どんぶりごと小わきにかかへ、そろそろゆく。・・・

とあるから、このような場所ではどんぶりが必需品であったことがわかる。

以上みてきたように、蕎麦の容器として、十八世紀の中ごろから、どんぶりとよばれる器が使われ、一部に高級なものもあった一方、「馬方の井飯」、あるいは夜鷹も食べた「二八蕎麦」の食器としても、どんぶりが使われているのだから、安価な実用品もずいぶん普及していただろうことがわかるのである。

Ⅵ. 「うな井」と天ぷら

今では「うなぎ」といえば、漆器の器に入ったものが主流で「うな重」とよぶことが多いようだが、少し前まではなんとといっても「うな井」であったようだ。

天保四年（1833）の『世の姿』に、

うなぎの蒲焼は天明のはじめ（1780頃）上野山下仏店にて、大和屋といへるもの初て売出す、その頃は飯を自分で持参したと聞く、近來はいずれも飯をそえて売り、又茶碗もりなどというもあり。

とある。天明年間には、蒲焼単体の販売であったものが、次第に飯をそえて売られるようになったことがわかる。

また、斎藤彦麿の『神代余波』（弘化四年 - 1847）には、

大江戸にては早くより天下無双の美味となりしは、水土よろしき故に、最上の鰻出来て、三大都会に勝れたる調理人群居すれば、一天四海に比類あるべからず、我六七歳の頃より好み喰て、八十歳までも無病なるは、この霊薬の功験にて、草根木皮の及ぶ所にあらず、さるを、むかし蒲焼といひしは、魚の口より尾まで竹串を貫きて焼たるが、蒲の穂に似たる故に号けたる也、当世のは蒲の穂には似もつかず、鎧の袖に似たり

とある。弘化四年に八十歳であった斎藤彦麿が、六～七歳のころから食べていたというから、『世のすがた』という天明年間、蒲焼が江戸で流行し始めたという記述と、ほぼ一致する。

ただし、斎藤彦麿がいうように、以前は鰻を丸のまま串にさして焼いており、それが蒲の穂に似ていることから「蒲焼」という名が生まれ、これが天明間に腹または背を開いて、何本かの串をさして焼く方法に改良され（当然味つけにも工夫がこらされたのであろう）、以後急速にひろまったのだろう。

因に、享保二十一年（1736）版行（京都）の江島其碩『浮世親仁形気』に、

いたみ入らして嫌といはせぬ仕掛の網にかけて、鯉の吸物小づけ食に、鰻の焼物、筍に串貝の煮物など取合せ、・・・

とあり、このころは蒲焼とは呼んでいない。料理法も鰻を開いて、タレをつけて焼くといったものとは異なるのだろう。

さて、以上の記録にはまだ「井」ということばは出てこない。『世のすがた』に「茶碗もり」がでてきたとあるのが、わずかにそれと感させるところだろうか。

井とうなぎ飯の合体を記したものとしては、宮川政運の『俗事百工起源』（元治～慶應）がある。

うなぎ飯の始並に蒲焼の事

うなぎ飯の始は文化年中、堺町芝居金主大久保今助より始る。（中略）此今助常に鰻を好み、飯毎に用ふれども百文より余分に用ひしことなしと。いつも芝居へ取寄用ひし故、焼きさましに成しをいとひて、今助の工夫にて、大きな井に飯とうなぎを一処に入交ぜ、蓋をなして・・・用ひしが、至て風味よろしとて、皆人同じく用ひしが始なりと云ふ。

と、うなぎ蒲焼好きの芝居の金主が、簡便と焼きさまし防止の効果をねらって開発したとしている。また、「蒲焼」という言葉の起源としては、

因に云ふ鰻蒲焼文字の事、近頃印板傍廂と云へる書に曰く、菖蒲焼は鰻の口より尾まで竹串を通して塩焼きにしたるなり、今の魚田楽の類なり、今は背より開き竹串さして焼くなり、昔の塩焼きより遙にまさりて無双の美味なり、

と、『神代余波』とほぼ同じ説明をしているが、「背開き」と「塩焼き」というややくわしい説明がみられる。

さらに、『守貞謾稿』では、

鰻飯 京坂でまぶし、江戸でどんぶりという。鰻井飯の略也。

江戸 鰻飯百文と百四十文、二百文。…^{あさがお}葬形の井鉢に盛る、鉢底に熱飯少をいれ、其上に小鰻首を去り、長さ三四寸の物を焼きたるを五六つ並べ、又熱飯をいれ、其表に又右の小鰻を六七置く也。鰻骨を去り首も除き、尾は除かず。

と、作り方をやや詳しく説明している。ここにいたって、初めて「鰻井」という言葉がでてくるようだ。因にこの『守貞謾稿』の「葬形の井鉢」という文言と、添えられた図によって、「井＝朝顔形」という思いこみ？が（私のなかにも）醸し出されていたのかもしれない。

また、京坂で鰻飯のこと「まぶし」といっているが、これがいまの「まむし」の起源になるのだろうか。

ただ、うな井が現れたといっても、蒲焼の主流が井であったわけではない。『守貞謾稿』でも、京坂では鰻屋で「うな井」を兼ねて売るが、江戸では、名のある鰻屋ではうな井を売らず、中以下の鰻屋がうな井を兼ねて売るか、うな井を専ら売るとしている。

さらに、「生業 下」の鰻の蒲焼売りの項目で、

京坂蒲焼は朱塗の大平椀に盛る、大價銀三匁小二匁、江戸は陶皿に盛る、大一串中二三串小四五串を一皿とす、各價二百錢、天保府命後百七十二文に売る家もあり。

又因曰京坂は鰻をさきて大骨を去り、首尾全体にて焼之、而後斬て椀に盛り、焼之時鉄串を用ひ、串を去て椀に盛る、江戸は大骨を去り、鰻の大小に応じ二三寸に斬り、各竹串二本を貫き、焼て串を去り皿に盛る。

江戸は焼之に醤油に味醂酒を和す、京坂は諸白酒を和す、諸食ともに、京坂にては諸白を交へ、江戸にてはみりんを交ゆ也。

又京坂は鰻を腹を裂き、江戸は背をさく也。

と、京坂の鰻の焼きかたの差をくわしく説明するとともに、京坂では漆塗の大平椀で、江戸では陶器の皿にもって客に供したようだ。

さて、これより大分あとの鹿島萬兵衛『江戸の夕栄』（大正十年）では、

^{どんぶり}鰻井の元祖は葺屋町の大野屋（大鉄）です。人形町尾張屋の^{かわどん}川井は三百文で、鰻がニタ側はっており、飯もたんと盛ってありました。

とあるから、さきの『俗事百工起源』とあわせれば、考案が大久保今助で、商売として売り出したのが、大野屋ということになるのだろうか。

そして、『守貞謾稿』と『江戸の夕栄』の双方で、うな井のことを、単に「どんぶり」というているから、幕末のある時期から明治期には「うな井」が「どんぶりもの」の代表選手であったのであろう。

VII. 天井は新しい？

同じ『江戸の夕栄』に、

天麩羅は上流の料理に出さぬではなきも、多くは即席料理の出し物にして天麩羅専門の料理店というほどの家はあらず。多くは家台見世のものにてて天麩羅茶漬店、飯付き一人前二十四文が三十二文、せいぜい四十八文ぐらゐのもの

とある。

天麩羅の起源については山東京山の『蜘蛛の糸巻』がよくしられている。これによれば、天明の初年（1780 頃）大坂の商家の次男利介が、江戸に駆け落ちして、山東京伝の居宅の近くに住まう。つね日ごろつき合いがあったが、ある日利介が、

大坂にてつけあげといふ物、江戸にては胡麻揚とて辻うりあれど、いまだ魚肉あげ物は見えず。うまきものなれば、是を夜見世の辻売にせばやとおもふ。

と京伝に相談する。さっそく試食してみるとうまいので、商売をはじめたらどうかと助言をうける。そこで利介は、

是を夜見世にうらんに、そのあんどんに、魚の胡麻揚とするすは、なにとやらん物遠し。語声もあしゝ。先生名をつけてたまはれと云ひける

と、京伝はすこし考え、「天麩羅」と書いて見せた。利介が不審顔をするので京伝は、

足下は今天竺浪人なり。ふらりと江戸へ来りて売り始める物ゆゑ、てんぱらなり。てんは天竺のてん、

即ち揚ぐるなり。ぶらに麩羅の二字
を用ひたるは、小麦の粉のうす物を
かくるといふ義なり・・・

と説明している。

大坂で「つけあげ」、江戸で「胡麻揚」と
いていたものは、今東京でいう「さ
つま揚げ」で、九州や四国ではこれを
いまも「テンブラ」とよんでいる。利
介の「発明」は、スリ身の揚げもので
あったものを、魚の形をしたままで揚
げたところにあったわけである。

ところで、徳川家康が、茶屋四郎次
郎のすすめた「鯛の胡麻油揚げ」を食べ
て腹をこわし、それがもとで亡くなっ

図 17 『江戸職人尽絵詞』（文化三年頃）
（東京国立博物館蔵・岩崎美術社『職人つくしえ』より）

た話はよく知られているし、寛文四年（1664）の『料理物語』にも、「麩の油揚げ」が載っている。

また、延寶年間（1670年代）に写された『和蘭陀菓子製法』には、「テンフリ」という料理（菓子）が紹介されているし、さらに安永十年（1781）正月の豊竹座の浄瑠璃「昔唄今物語」に、「天麩羅」という言葉がでてくるといふ（斎藤月岑、三田村鳶魚）。

だから、天明年間に利介が発明し、京伝が命名したというのは、弟である京山の思い入れにすぎないとしても、魚類の姿揚げを利介が再評価し、京伝が、過去の食品の名前のなかから、「天麩羅」を選んで命名し、京伝のブランド力で大々的に売り出して、以後しだいに日本料理の定番となったことは明らかであろう。

なお、『守貞謾稿』では、「京坂の天ぶらは半平（はんぺい - はんぺん）の油揚げをいい、江戸の天麩羅は、あなご・芝葱び・こはだ・貝の柱・するめなどで、温鈍粉をゆるくといて衣とし、油揚げしたものをいう。野菜の油揚げは江戸でもてんぶらといわずあげものという」としているから、関西方面での江戸風の天ぶらの流行は、しばらく後になるのであろう。

天麩羅は「多くは家台見世」で売られ（図 17）、飯つきで一人前二十四文からせいぜい四十文というのだから、『守貞謾稿』にみる鰻井の値段（百文～二百文）とくらべると、はるかに安いことがわかる。

『誹風柳樽』（98 編）に、

天麩羅のゆびを擬宝珠へ引なすり

とあるから、歩きながら食べるような、ごく手軽なものであったことがわかるのである。

さらに、井にいれて売ったという話はないようだから、今鰻井とならび称せられる「天井」があらわれるのは、少なくとも明治以降でなければならない。

守貞がしめす天ぶらの中味をみると、野菜類は一切なく、あなご・芝糸び・こはだ・貝柱・するめが主だったものだったようである。この材料に、立派な海老が登場した時、はじめて「天井」がどんぶりものの方の雄としてもてはやされることとなるのだろう。

VIII. 「うな井」の流行と「高級」どんぶりの消滅

さて、鰻の蒲焼については、どんぶり飯とあわせた「うな井」が開発された。そしてそれを幕末の喜田川守貞は、単に「どんぶり」と呼んでいるし、また明治から江戸を回想した鹿島萬兵衛も「鰻井^{どんぶり}」と、ふりがなをうっている。

また、「天井」は明治以降であろうことは上のべた（カツ井・中華井・牛井などは言うまでもあるまい）。

器自体の呼称と、料理の提供の方法が渾然として説明しにくいが（というより私自身よくわからない部分が多いのだが）、少なくとも幕末には、料理としての「どんぶり」は、間違いなく「うな井」をさしていたと考えられる。

とすれば、うな井の普及によって、これがどんぶりの代表選手となり、これまで宴席などで、酒の肴をもる器として使われていた大鉢に与えられていたどんぶりという名称が、しだいに用いられなくなったと考えるのが自然ではないだろうか。

これに対して、うどん・蕎麦は料理自体がどんぶりと呼ばれることはなく（「うどん井」「蕎麦井」など）器自体のみがどんぶりと呼ばれ、現在まで続くことになるのだろう。

記録をさらにくわしくあたれば、もう少し井の使用例を見つけることができようが、以上煩雑に書きあげたことをまとめれば、

十八世紀中頃から後半にかけて、「どんぶり」という言葉があらわれる。その一つは、比較的高級な料亭などで用いられるものであって、底がすばみ口が開いた「朝顔形」をしたものだったようだが、絵画をみると、カボチャの下半分のような形のものも同様に使われている。

もう一つは、主として蕎麦の容器として用いられたもので、蒸籠 - 大平 - 皿と変化して最後に盛りは蒸籠、かけ（ぶっかけ）は井ということになったようだ。これが十八世紀の中頃らしい。この井はかなり高級なものもあったようだが、二八蕎麦でも使われていることから、あるいは馬方の井飯という表現からも、安価なものも多く使われていたようだ。

鰻の蒲焼は天明年間にはじまり、次第に飯付きでも売られるようになったようだが、鰻飯 - 鰻井がはじめて現れたのは文化年間であつたらしい。そして幕末には「どんぶり」といえば「うな井」をさしていたようだ。そしてうな井の地位向上が、これまで高級食器の一部にも与えられていたどんぶりの名まえを消滅させる原因にもなったのだろう。

天ぷらは、天明年間に、山東京伝のあとおしで、再発見 - 普及が図られ、比較的庶民的な食べ物として普及したが、「天井」は明治以降に、「海老天」の発明とともにひろまったと考えてよいのだろう。

Ⅸ. 附・わりばしの始まり

どんぶりといえは常に対になるのが、わり箸である。

わり箸については『守貞謾稿』にくわしい説明がある。「生業上」鰻飯の項で、

(鰻飯 - うな井には) 必ず引き裂き箸を添る也、此箸文政以来比より、三都ともに始め用ふ、杉の角箸半を割りたり、食するに臨で裂分て用之、是再用せず浄きを証す也。

然れども、此箸亦箸所に返し、丸箸に削ると云也。

鰻飯のみに非ず、三都諸食店、往々用之、却て名ある貸食店には用ひず、是元より浄化きが故也。

と説明している。

これによれば、わり箸 - さき箸が使われ始めたのは文政期で、鰻飯だけでなく、江戸・京坂ともに飲食店でよく使われたようだ。これはもちろん「かけ流し」にすることによって、清潔感をあらわすためであろうが、高級店では用いられなかったらしい。塗箸の上等なものを使ったのか、あるいは白木でも高級な材を用いた二本箸であったのかもしれない。

これ以上追加することはないのだが、わり箸の始まりについては、もうすこし早まりそうだ。まず、『誹風柳樽』31 編（文化二年 1805）に、

料理茶屋連理の箸をつけて出し

とある。特に説明するまでもなく、連理の箸がわり箸をさしていることは明らかだろうし、どのような場所で、この箸が使われ始めたかがよくわかる例である。山中共古の『砂払』のうち、「払砂録」二十に、十返舎一九の『青楼松之裡』（享和二年 - 1802）をひいて、

いのじいせ屋のさきばしをみて、はしがいっぽんで食われるものか、と小言をいひしてやいにして云々
これは田舎出の者、鯛の頭のうしほ煮を、骨が食へるものかと怒りしをいへる文なるが、いの字
伊勢屋の箸といふもの、世に知られしものと見ゆ。

と書いている。

『守貞謾稿』では「文政以来ころ」といっているが、これによると、ほぼ二十年さかのぼる享和年間には、すでに「さきばし」があったことになる。そして、「田舎者」が、「箸が一本で食われるものか」と言っているのだから、まだこの箸がさほど普及していなかったろうことが推定で

きょう。

「いの字伊勢屋」といえば、新吉原江戸町二丁目にあった有名な茶屋で、わり箸もはじめのうち、このような場所でのみ使われていたのであろう。さらに、あとわずかさかのぼるものとして、『柳樽』29編（寛政十二年 1800）に

割箸を片々無いと大笑い

とあるから、やはり割り箸の出始めの混乱がうかがえるのである。さらにここでは、「さきばし」でなく「わりばし」といっているから、当初から両方の名が使われていたらしいことがわかる。

もっと文献を調べれば、もう少し遡ることができるかもしれないが、十九世紀の初頭に、外食産業の発展の中で、まず仕出し屋が、清潔感とある程度の高級感を演出するために、この「さきばし」あるいは「引裂箸」を開発し、その後、比較的安価な料理店や屋台へと普及していったものであろう。そして『守貞謾稿』では、文政年間を裂き箸の始めとしていることから、このころになって、三都にこの箸がずいぶん普及したとあってよいのではないだろうか。ただこれも『柳樽』96編（文政十年 1827）に、

山出しの下女割箸を二膳つけ

とあって、わり箸の出現から30年程たっても、都市以外ではさほど普及していなかったことがうかがわれる（ただし川柳では「下女」というのは、ずいぶん無知で滑稽なものとして扱われるから、そのままは信用できないが）。

ただ、喜田川守貞は、「この箸は箸所に返し、丸箸に削り直す」といっているから、夜たかさばのような、きわめて安く食事を提供する場では、このような再利用の箸がつかわれたのだろうし、さらにこれを簡単に洗って、何度でも使用したことではあろう。

だから、今のように一度使えばすぐにゴミ箱入りということはなかつただろうし、「いの字伊勢屋」のように、ずいぶん高い料金をとつたろうと思われるところでは、削りなおしのための払い下げをしていないとしても、燃料の一部として再利用されたであろうことは容易に想像できよう。

発掘調査では、箸が結構みつまっている。しかし、その捨てられかたを見てみると、大名屋敷のなかでの宴会で使われたあと、まとめて捨てられたと思われるものが多い。そしてその箸は、わり箸であった痕跡（箸の端の一つの面に、引きさかれたあとのあるもの）は全くみられない。だから、このような儀式的な宴会に使われたものは、かならず廃棄することになっていたのかもしれない。

しかし、日常生活で使われたわり箸は、削りなおして再利用するか、燃料として有効に活用さ

れたと思われ、今後も発掘で見つけることは、あまり期待できそうもないだろう。

つけたり

庶民のあいだで「どんぶり」という言葉が認知され、日常的に使われていたことを示すための小噺の一つ。やや破礼噺が^{はれ}かっているが、一般的に考えられていたどんぶりの大きさを知るうえでも参考になるう。

「コレ此土を丸めて、コウ握りこぶしをこぶ入れて、茶碗ができる。もつと大きくこしらへようと思へば、^{ひじ}肘を入れる。これが茶の湯の茶碗の下地だ」

「どんぶりはどうこしらへる」

「どんぶりか。それは土をうすくして、膝がしらへかぶせてぬけば、コレ此の通り」

「こいつはい。そして摺鉢はどうする」

「摺鉢か。大きく土を丸めて、尻をまくつて、かうさ。南無三、かたくちになつた」

落噺集『詞葉の花』(寛政九年刊行)より

主な参考文献

数種の刊行物に収録されているものも多いが、私が参考にしたものを列記する。

羅文『俳諧古文庫』(続燕石十種第二巻、中央公論社)

栗山善四郎『江戸流行料理通』(教育社新書・原本現代訳)

武陽隠士『世事見聞録』(改造文庫)

大田蜀山人『俗耳鼓吹』(日本隨筆大成第三期第四巻、吉川弘文館)

四方山人(大田蜀山人)『料理ノ献立 頭てん天口有』(教養文庫『江戸の戯作絵本(二)』)

銭屋五兵衛『年々留』(法政大学出版局、1984)

作者不詳『寛天見聞記』(燕石十種第五巻、中央公論社)

為永春水『春告鳥』(日本古典文学全集 47、小学館)

川路聖謨『遊芸園隨筆』(日本隨筆大成第一期二三巻、吉川弘文館)

滝沢馬琴・山崎成美『けんどん争ひ』(新燕石十種第二巻、中央公論社)

喜田川守貞『守貞謾稿』(東京出版同志会『類聚近世風俗志』、1908)

菊池貫一郎『絵本江戸風俗往来』(東洋文庫)

島亭馬撰・美満壽連作『こと葉の花』(岩波文庫、化政期落語本集)

作者不詳『世の姿』(未刊隨筆百種第六巻、中央公論社)

斎藤彦麿『神代余波』(燕石十種第三巻、中央公論社)

宮川政運『俗事百工起源』(未刊隨筆百種第二巻、中央公論社)

1 どんぶり考 附・わりばしの始まり

鹿島萬兵衛 『江戸の夕栄』(中公文庫)

山東京山 『蜘蛛の糸巻』(日本隨筆大成第二期第七卷、吉川弘文館)

作者不詳 『料理物語』(教育社新書・原本現代訳)

山中共古 『砂払』(岩波文庫)

三田村鳶魚 『食物と江戸ツ子』(『江戸の衣食住』青蛙房)

2. 東京大学医科学研究所（旧大村藩下屋敷）から出土した鉛塊について

原 祐一

I. はじめに

江戸時代、鉛は寛永通宝をはじめとする青銅、白粉、網の錘等や、南蛮吹きと呼ばれた銅精錬に使用された。遺物が出土した東京大学白金構内遺跡 医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点は港区白金台に位置し、江戸時代の大村藩下屋敷に該当する。地下室SU360遺構底部より棒状軟質金属112本、総重量約20kgが出土した（巻頭写真3）。遺構は東大陶磁器編年から18世紀中頃に廃絶されたとされる。これらの金属をICP-MS分析、PIXE分析した結果、出土鉛塊は高純度鉛であることが明らかになった。棒状鉛塊の製造方法等についても検討を行なった。本研究は、伊藤博之（和光金属技術研究所）、小泉好延（武蔵野文化財修復研究所）の共同研究である。

II. ICP-MS分析

ICP-MS分析は島村匡氏（北里大学）にお願いした。保存状態良好な資料を選出し10mm幅の金属塊を切出した。表面部の錆を除去し分析を行なった。

・試料の前処理と分析方法

1. 試料片の中央部の一部を切断し、硝酸：純水＝1：1で表面を洗浄。
2. 乾燥後秤量 0.1701g
3. 硝酸：純水＝1：1の溶液で加熱溶解。さらに純水で希釈し100.026gに調整した。
4. 溶液の一部1.018gを取り純粋で希釈し20.043gとし分析を行なった。
5. 分析は5回繰り返し、ほぼ全金属元素について定性分析を行い、含有量の多いものについて定量分析を行なった。

・分析結果

定量値を表1に示す。微量成分としてSb、Cu、Ti、Ag、Asが検出された。珪素、硫黄、リン、炭素、塩素は非測定である。分析に供した金属試料は純度99.4%の高純度鉛であった。

III. PIXE分析

保存状態良好な資料を選出しPIXE分析（荷電粒子励起X線分析 Particle Induced X-ray Emission）を行った。標準試料を入手できなかったため、微量成分の定量は行なわれなかったが、ICP-MSの分析と同様に微量なCu、Fe、Sb、Snなどが確認された。

IV. 棒状金属塊の形状

黒灰色の表面には所々に白色錆が見られ、一部では金属内部まで達している部分もあった。長さ216～218mm（7寸1～2分）とほぼ一定で断面はかまぼこ型を呈していた。両端部の幅は広く中央部はくびれ、厚さも両端部は厚く、中央部は薄かった。仔細に観察すると全ての金属塊において、両端部の厚さは同一ではなく、どちらか一方の端部のほうが厚かった。端部の幅は22～24mm（7～8分）で外側にバリが広がるものもあった。中央部の幅は14～20mm、端部の厚さは5.8～10.7mmで中央部は3.9～8.4mmであった。重さは110～300gであった。1個単独、2個、3個が連結したものもあった。かまぼこ型凸面表面には縦の筋が全資料に見られた。頭写真3は3本が連結し重量は536.85gであった。

V. まとめ

出土した棒状鉛塊はAs、Sn、Sb量が微量で99.4%の高純度であることが明らかになった。鉛塊の出土は住友銅吹所跡で報告されている^{注1)}。この鉛塊は銅精錬所から出土した遺物であり、銅の精錬に使用されたものである。報告ではCu量に注目し、山元より購入された荒鉛と銅吹所内で精錬された鉛である可能性が指摘されている。医科学研究所出土鉛塊は、住友銅吹所跡の鉛塊と同様な高純度鉛であった。本遺跡で銅精錬が行なわれたとは考え難く、大村藩下屋敷に何らかの材料用として持ち込まれた鉛と考えられる。現在のところ用途を限定することができる出土資料、文書は確認されていない。しかし、本鉛塊は精錬用ではなく一般に流通した鉛材料という点で貴重な資料である。

『鼓銅図録』、『飛騨かな山絵図』^{注1)}（巻頭写真4）に鉛塊の鑄造方法が描かれている。『飛騨かな山絵図』によれば鉛は鉄鍋の炉で溶解され、溶解された鉛は銅製の金型に鑄込まれ金型と共に水桶に投入し急冷されて棒状鉛塊となる。出土棒状鉛塊には、凝固した所へ熔湯が再び加えられたものがいくつか見られた。鉛塊の観察から冷却鑄型を用い、熔湯を急冷させている事が伺え、絵図と同様な方法により製作されたものと考えられる。また、左右の厚みと状態が異なるのは、鑄型を傾斜させ鉛を冷却鑄型に鑄込んだためと考えられる。住友銅吹所跡の棒鉛塊は実測図から同様の方法で鑄造されたものと考えられる。日本金属学会附属金属博物館所蔵の英国スワンシー大学博物館より貸与された鉛塊は棒状鉛が8本連結した板チョコ状であった。本鉛資料と同様の方法で製造されたかは不明である。

出土鉛塊はどこから持ち込まれたのかは現在のところ不明である。大村藩の国許では大串金山、雪浦金山、波佐見銅山等の発掘が知られる。「大村家譜」十一（東京大学史料編纂所蔵2075/863/9-9）に「純熙代 同（嘉永）六年癸丑正月十八日上書日、領内波佐見村或産鉛矣邑請試掘之許之如何、二月九日老中阿部伊予守正弘授付札曰、宜其請安政二年以鉛少止之乃告 大村」（渋谷葉子氏調査）とある。国許での鉛産出と流通に関する具体的史料は現在のところ見出せないが、大村産鉛、他国産鉛、輸入鉛を含め現在調査を行なっている。

謝辞

学習院大学 渋谷葉子氏、住友資料館 今井典子氏、日本金属学会附属金属博物館 野崎準氏、神岡町史編纂室 向島昌雄氏、東京大学原子力総合研究センタータンデム加速器 中野忠一郎氏、松崎浩之氏に謝辞申し上げます。

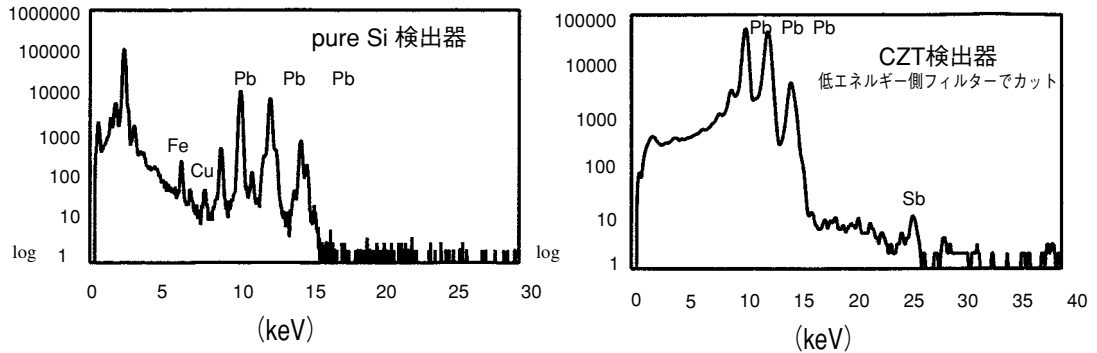


図18 PIXEスペクトル 東京大学原子力総合研究センタータンデム加速器による分析

表1 東京大学医科学研究所出土鉛塊分析結果 (wt%)

試料No.	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Bi	Ti	Fe
白金42	0.11	0.048	0.05	0.036	0.31	0.014	0.08	<0.05

分析は北里大学 鳥村匠氏によるICP-MS分析

表2 住友銅吹所跡出土鉛塊の分析結果 (wt%)

試料No.	種類・形状	比重	Pb	Cu	As	Ag	Ca	Sb
30	鉛インゴット	9.91	95.7	0.044	<0.01	0.03	<0.01	0.2
32	鉛インゴット	10.7	98.2	0.075	<0.01	0.05	<0.01	0.7
55	鉛インゴット	11.05	97.9	0.084	<0.001	0.05		
25	鉛インゴット	10.3	98.4	0.086	<0.01	0.04	<0.01	<0.01
24	鉛インゴット	11.2	99.2	0.086	<0.01	0.03	<0.001	0.2
31	鉛インゴット	10.7	98.5	0.24	0.02	0.03	<0.01	0.08
23	鉛インゴット	10.3	97.7	0.26	<0.01	0.04	<0.001	0.07
123	鉛インゴット	10.34	98.4	10.08	0.05	0.022	<0.01	

住友銅吹所跡発掘調査報告1998(財)大阪市文化財協会「3. 鉛製遺物」内田俊秀PP4044-10 ICP-MS分析

参考文献

原 祐一、大成可乃、堀内秀樹、寺島孝一、伊藤博之、小泉好延 2001 『東京大学医科学研究所(旧大村藩下屋敷)から出土した鉛塊について』日本文化財科学会第18回大会発表要旨

注

1. 「新校正山相秘録」鉛山第六 鶴田恵吉編1944『佐藤信淵鉱山学集 富山房蔵版』PP40-41
2. (財)大阪市文化財協会『住友銅吹所跡発掘調査報告』1998

東京大学構内遺跡調査研究年報 3

1998・1999年度

2002年3月31日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場4-6-1

印 刷 株式会社セビラス